

事項一六・オムスク政府承認問題一件

五〇三 二月十七日

在米国石井大使ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

日本ノオムスク政府援助ト其代償ニ関スル新

聞報ニ付報告ノ件

第一三八号

(二月十八日接受)

日本ハ「オムスク」政府ニ兵力借款ノ援助ヲ与ヘ代償トシテ南部西比利亜ニ鉦山権ヲ得ヘシトノ浦塩電報数日前電報通信ニ依リテ加奈太ヨリ当国諸新聞ニ伝ヘラレ多少世人ノ注意ヲ喚起シタルカ更ニ二月十二日附「オムスク」発倫敦「タイムス」及「パブリック、レジャヤ」特電ハ聯合側ノ「ボルシェヴィキ」ニ対スル態度ハ「オムスク」政府ヲ驅テ日本ニ傾カシメ軍人及商人間ニハ此際日本ヨリ軍事上ノ援助ヲ借りテ一挙「ボルシェヴィキ」ヲ激滅シ帝政ヲ恢復シ此報酬トシテ日本ニ「ウラル」迄ノ西比利亜鉄道管理権及西比利亜北満洲ニ特殊利権ヲ提供スヘシトノ論盛ンニ行ハレ着々「プロパガンダ」ヲ行ヒツツアリ未タ正式ノ交渉ナキモ日本側ニ対シテ頻リニ此機運ヲ助成シツツアルハ

ラ手ノ付ケ様ナク今ヤ民政、軍政、略定マラントスルモ之ニ要スル政費ヲ得難ク代官トシテ殆ント実力ヲ施スニ策ナシ

第二、「オムスク」政府ハ兎角「ホルワット」ヲ信頼セス動モスレハ之ヲ疎外セントスルノ傾アリ是等ノ為カ其補佐官及？官會議員等モ自己ノ欲スル者ヲ任命スルヲ得ス今回ハ「ホルワット」ニ代フルニ「ステパーノフ」少將(現陸相ニシテ「コルチャク」ノ腹心ノ者)ヲ以テスヘシトマテ伝ヘラレ又「コルチャク」自立ノ頭初「ホルワット」ハ日本ニ国ヲ売ル者ナリトノ電報ヲ彼ニ与ヘタルカ如キ今日尚イタク「ホルワット」ノ神經ヲ刺激シアリ

第三、列国相互間ノ協調ヲ欠キ就中最近「オムスク」政府支持ニ関シ英米ノ反目アリ「カルムイコフ」事件ニ就テハ日本ノ反感アリ「セミヨーノフ」事件ニ就テハ日英ノ確執アリ為ニ代官トシテ受クル日英米ヨリノ要求希望多ク相反シ且ツ最近支那カカノ東清鐵道政策ニ種々ノ反対ヲ試ムル如キ障碍事故ノ彼ヲ苦シムルモノ渺カラス

第四、米國ノ如キハ浦潮ニ於テハ「ブテンコ」ノ外何等ノ行政權ヲ認メスト称シ其結果極東代官トシテ彼ハ今

一六 「オムスク」政府承認問題一件 五〇五

事実ナリ云々ト報道セリ
在仏大使ヘ転電セリ

五〇四 二月十九日

浦潮軍參謀長ヨリ
參謀次長宛(電報)

ホルワットノ勢力衰退ニ付日本ハオムスク政府支持策強化及極東産業復興ヲ急務トスル旨
具申ノ件

浦參第二八五号

一、近時東清鐵道庁ヲ中心トシテ「ホルワット」ハ極東總司令官辭退ノ意アリト伝フ此風説ノ起レルハ彼ノ境遇ニ依リ察スルニ必スシモ偶然ニアラス現況ヲ長ク持續セハ之ニ類スルコトノ或ハ実現スルヤモ計リ難キ節アリ

二、之カ重ナル原因ヲ推断スルニ

第一、財政ノ窮乏ハ其主因ニシテ其救済ヲ与國ニ求メ能ハス「オムスク」ヨリスル之カ援助ハ極メテ不確實ニシテ現下極東ニ於ケル唯一ノ急務ナル貨幣ノ整理ス

尚浦潮ニ於テ一ノ家屋スラ入手シ得サル有様ナルニ加ヘテ浦潮地方ニテハ民主的運動再ヒ高マリ来リテ彼ノ地位ヲ脅威セントス而モ彼ハ之ニ備フヘキ軍隊スラ編成シ移動スルノ自由ヲ有セス

第五、以上「ホルワット」ノ境遇ヲ改善スルニ関シ当方ニ於テモ出来得ル限リノ努力ヲナスヘシト雖モ他方ニ英米ト日本トノ企圖錯綜セル今日先ツ「オムスク」政府ニ手ヲ入レ英國トノ協調ヲ保ツヲ急務ト感セラル恰モ当方面英軍憲側ハ我ト接近セントスル傾キナキニアラス且ツ「オムスク」政府ノ意嚮モ我ニ良好トナリツツアルノ期ニ於テ高級外交官ヲ該地ニ急派シ一挙ニ形勢ヲ變転スルニ力ヲ尽スヲ第一義ト感セラル、同時ニ極東ニ於テハ「ジャン」ノ「ノックス」協定ニ対シ日本ノ立場ヲ明確ナラシムルコト緊要ニシテ之ニ次テハ日露銀行設立或ハ之ト類似ノ方法ヲ以テ露國産業ノ復興ニ第一声ヲ挙げケ之ヨリシテ「ホルワット」ノ財政ニ幾分ナリトモ緩和ヲ与フルヲ有利ナリト認ム

五〇五

四月七日

在浦潮軍參謀長ヨリ
參謀次長宛

五三三

米英仏各国ノ対過激派態度ノ現状ニ鑑ミオム
スク政府ハ日本ノ援助ヲ切望シ居ル件

浦参第七七八号

四月六日田中少将発第二九番電

大本營特別課長「ズーボフ」来訪シ先ツ予テヨリ小官ト会谈ノ希望ヲ有セシモ今日迄其ノ意ヲ果サリシヲ遺憾トスト語リ本日ハ何等上司ノ意志ニアラスシテ全然個人的ニ来訪セル次第ナリト前提シ目下西伯利亚ノ事態ハ考慮ヲ凝ストカ或ハ計画ヲナストカ云フカ如キ緩慢ノ時期ニアラス断然タル実行手段ヲ採ル可キ危急存亡ノ秋ナリ之カ説明トシテ先第一ニ貴下ニ告ケント欲スルハ西伯利亚ニ於ケル内政状態ニアリ西伯利亚ニ於ケル過激派ノ情態カ東スルニ從ツテ旺盛ナルハ貴下ノ知ラルル通りナリ今日吾人カ安全ナリト思惟シツツアル西部西伯利亚モ将来ハ再ヒ過激派ノ勢力ノ浸潤スル所トナルヤモ計ラレス之カ証拠トシテ過激派煽動ノ根源タル米国ハ漸次ニ其ノ兵力ヲ西ニ進メツツアリト語レリ小官ハ之ヲ遮キリ貴下ハ職掌上最近紐育「タイムス」ノ記事ニテ米国ノ過激派ニ対スル輿論ニ一變調ヲ来タセルコトヲ承知セラルルナラント語リタルニ吾等之ヲ承知

ハ速答ニ窮スル次第ナリト答ヘタレハ彼ハ何卒御一考ヲ煩シ度次回ニハ自分ヨリ一層具体的ニ御話セントテ先ハ分レタリ小官ハ以上「ズーボフ」ノ来訪ヲ以テ「セミヨーノフ」問題解決後ニ於ケル我援助ノ程度ヲ探ランカ為ナランカトモ察セリ

五〇六 四月二十六日

在ハルビン佐藤総領事ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

オムスク政府ハ露国復興統一ノ中核タルベキ

旨ノ意見松島総領事ヨリ具申ノ件

第三九九号 至急

松島ヨリ閣下ヘ第五七号

四月二十三日外務大臣代理ヲ往訪シタル処「セメノフ」問題ニ言及シ極東方面ヨリ今ニ最後ノ回答ニ接セス本件ノ解決又モ遷延スルハ甚タ遺憾ナリト語レリ本問題ノ交渉ニ関聯シ本官ノ得タル感想ニ依レハ東部西伯利亚ニ於ケル本邦人中ニハ西部西伯利亚ノ情勢並ニ「オムスク」政府ノ実力ニ関シ十分ナル諒解ヲ有セサルニ依リ為ニ政府反対党又ハ過激派ノ手先タル猶太人其他ノ言ヲ輕信シテ或ハ同政府ノ威令ハ当地方ニ行ハル、ニ過キストナシ或ハ政府部内ニ暗

スルモ予ハ「ウィルソン」カ大統領タル間ハ之ヲ信スル能ハス

「ウィルソン」人道主義ハ極端ナル社会主義ヲ意味スルモノニシテ「ウィルソン」ノ一派ハ米国ニ露国ノ「レーニン」現ハルルモノナリ加フルニ經濟上ニ於テ米国ハ将来極東露国ニ於テ満足スルモノニ非ズ「ウラル」迄全西伯利亚ノ全部ノ利権ヲ獲得スルモノナリト答ヘ之ヨリ(不明)トシテ列国關係ニ言及シ之迄「オムスク」政府ヲ援助シ呉レタルモノハ英国ト仏国ナリ然ルニ之ハ極秘ノ話ナルカ「ノックス」カ予ノ長官ニ語リタル所ヲ漏レ聞クニ英国カ自国労働党ニ懸念スル關係上露ノ過激派ニ対シ果断ノ処置ニ出ヅル能ハスト云ヘルト仏国ノ(不明)傾キアルヲ免カレス又兩國共大戦争ニ疲労シアリトスレハ結局過激派(不明)最モ健全ナル貴国ノ援助ヲ借ル以上他ニ方法ナキコトナル此窮境ニ処シ何トカ貴下ニ名案ナキヤト語リタレハ小官ハ其ハ重大ナル問題ナリ実ハ今日迄米国ノ露国領ニ於ケル施設ハ承知セサルモ左程迄ナリトハ信セサリキ然モ露国内ニ於ケル米国ノ事ヨリシテ我日本カ米国トノ親善ヲ破ルヘシトハ想像セサレハ是益々難問題トナル斯ル難問ヲ課セラレテ

闘アルヲ以テ近ク政変起ルベク縦シ之ナシトスルモ政府ノ微弱ナル到底露国復旧統一ノ大事業ヲナスノ実力ヲ有セスト速断シ從テ日本ハ東部西伯利亚ニ於ケル或ル一派ヲ擁護シテ茲ニ其勢力ヲ扶植シ依テ同地方ニ於ケル実権ヲ把持スルノ策ニ出テサル可カラストノ意見ヲ抱クモノアルヤニ察セラル、処本官ノ所見ニ依レハ「オムスク」政府ノ施設ハ漸次其緒ニ就キ露露ニ於ケル戦勝ト相俟ツテ政府ノ權威益々高マレルモノ、如クナルニ付他日露国復興統一ノ際全露政府タルモノハ現「オ」政府其モノニアラストスルモ少クモ其改造セラレタルモノナリト思考ス目下政府ハ軍隊ノ編成ニ努力シツ、アル処最近募集シタル新兵ハ多クハ中流社会ノ子弟ニシテ成績良好ナリトノ事ナリ尤モ政府軍カ今后過激派掃蕩ノ目的ヲ達スル為メニハ列国ニ援助ヲ俟ツモノ多カルヘキハ勿論ナルモ最近英仏兩國ハ兵器其他ノ軍需品ヲ供給シテ大ニ「オ」政府ヲ援助スルノ方針ヲ執ルニ至リ既ニ英國軍隊用ノ被服ヲ着用シ居ル露兵多キニ徴スル時ハ政府ノ武威ハ大ニ加ハルヘシ

五〇七

五月一日

在ハルビン佐藤総領事ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

一六 「オムスク」政府承認問題一件 五〇八 五〇九

オムスク政府承認ヲ繞ル英仏政府ノ動向ニ対

シ我執ルヘキ措置稟申ノ件

第四二二号

松島ヨリ閣下ヘ第六一号

往電第六〇号ニ関シ「オムスク」政府軍ノ勝利ニ対スル英
仏兩國ノ祝電ハ兩國ノ間ニ予メ打合セアリタルモノト想像
セラレザルニアラス若シ然ラスストスルモ兩國等シク「オ」
政府ニ対シ十分ナル同情ヲ有スルコトヲ示スモノニシテ最
近ニ於ケル兩國ノ同政府援助振新聞電報ニ見ユル英國ノ
「アルハンゲルスク」ヘノ送兵松平発本省宛第二五〇号後
段「エリオット」ノ談話等彼此綜合スルニ同政府承認ノ時
期ハ漸次濃厚トナリツ、アルモノ、如ク察セラル、ニ付若
シ政府軍ニシテ進シテ「カザン」「サマラ」等ヲ有効ニ占領
スルニ於テハ政府承認問題ハ英仏兩國ヨリ提起セラル、ヤ
モ知レス而シテ英國ハ予メ帝國政府ト協議スルコトナクシ
テ「オムスク」政府ヲ承認スルカ如キコトナカルベシト思
考セラル、モ万一英仏共同シテ同政府ヲ承認シタル後帝國
政府ニ於テ其通告ヲ受クルカ如キコトアリテハ甚タ面白カ
ラサルニ付本件ニ関シ在英大使ヲシテ予メ英國政府ト諒解

貴電講第七六四号末段ニ関シ

帝國政府ハ從來「コルチャック」政府ヲ支持スル方針ニテ
現ニ最近該政府ニ対シ小銃実包二百万発(価格十五万円余)
ヲ供給シタルカ尚其ノ他同政府ノ要望シ居ル物資供給ノ為
目下交渉中ナリ

五一〇 五月十日

栃内海軍次官ヨリ
埴原政務局長宛

オムスク政府ヨリ「ロマノフスキー」中將ヲ

日本派遣ノ件

極秘官房機密第六一七号

大正八年五月十日

埴内海軍次官(印)

埴原外務省政務局長殿

在「オムスク」田中海軍少將ヨリ左記要領ノ電報有之御参
考迄ニ通知致候

左記

「オムスク」政府ハ極東ノ事態非ナルヲ知り日本ノ援助
ヲ得ンカ為四月二十六日「オムスク」発ロマノフスキー
中將ヲ日本ニ派遣シ日本当局ト重要ナル交渉ヲ遂クヘク

一六 「オムスク」政府承認問題一件 五一〇 五一

五三六

ヲ遂ケシメ置ク方然ルヘシト思考セラル

矢野ヘ転電済

五〇八 五月六日

在仏国松井大使ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

オムスク政府ヲ全露仮政府ト認ムル旨北露政

府決定ニ付丸毛ヨリ報告ノ件

第一四三号

(五月十二日接受)

丸毛ヨリ

第七四号

往電第七一号ニ関シ

北露政府ハ四月三十日ノ會議ニ於テ現「オムスク」政府ヲ
全露仮政府トシテ其唯一最上権ヲ公然認ムルニ決シ唯兩政
府ノ聯絡確立迄ハ独立ノ行動ヲ続クベキ事及「オムスク」
政府ヨリ委細ノ訓令アル迄ハ従前通り執務スベキ旨五月三
日附公文ヲ以テ「ミルレル」將軍ヨリ通牒アリタリ

五〇九 五月八日

内田外務大臣ヨリ
在仏国松井大使宛(電報)

オムスク政府ニ対シ日本政府物資援助ノ件

講第三五二号

之カ為メ「オムスク」政府ハ重大ナル讓歩ヲ辞セサル準
備アリト右ハ或ハ北樺太油田問題ノ解決ニ利用シ得ヘキ
カトモ存セラル為念

五一 五月十四日

在浦潮軍參謀長ヨリ
參謀次長宛(電報)

オムスク政府「ロマノフスキー」中將ヲ日本

ニ特派ノ件

浦參第九八七号

過日「オムスク」ヨリ歸來セル露国軍總司令官ノ全権委員

「ロマノフスキー」中將ハ来ル十七日(土曜日)当地出帆

敦賀ヲ經テ貴地ニ向フ同中將ノ任務ハ左ノ如シ

一、政府並ニ「コルチャック」ノ名ヲ以テ日本ノ極東ニ於
テ為シタル行動ニ関シ感謝スルコト

二、将来ニ於ケル日本ノ援助ヲ乞フコト

三、「ウラル」戦線ニ関シ目下ノ情況ニ於テハ露国軍自ラ
之ヲ処置シ得ヘキモ将来外国軍(例ヘハ匈牙利軍ノ如キ)
カ過激派ト協同スル際ニ於テハ日本ノ援助ヲ乞フコトアル

ヘキコト

四、日露兩國ノ關係ヲ一層親善緊密ナラシムルコト之カ為

五三七

メ経済上ノ問題ニ関シテモ充分密接ナル連繫ヲ保持スルコトヲ希望スルコト

五、「オムスク」ニ有力ナル代表者ヲ置キ相当ノ全權ヲ委任セラレ速カニ万事ヲ解決シ得ル如ク望ム本項ハ政府承認問題ヨリ切り放シ英仏ノ如ク代表者ノ派遣ヲ切望スルコト中將一行ハ令夫人令嬢副官ト計四名ニシテ先ヅ東京ニ赴キ爾後東京附近ノ適當ナル地ニ二週間計リ静養スルヤノ希望ヲ有シ居リ東京ニ於ケル旅館ニ就キ予メ配慮アリタク為シ得レハ敦賀迄出迎ノ者ヲ差立テラル、ヲ希望ス右手筈定マレハ通報アレ「ロマノフスキー」ハ英語ヲ話シ從テ自然米國ニ好意ヲ有スルモ極東ニ於テ日本ノ援助ヲ受ケルノ必要ハ認め居リ此ノ際同中將ヲ充分ニ歓待シ置クハ我政策上必要ト信ス

五二二 五月十四日 内田外務大臣會談
在本邦露国大使會談

在本邦露国大使ヨリ日本全權代表ヲオムスク

ニ派遣方申出ノ件

大正八年五月十四日露国大使クルペンスキー氏内田大臣ヲ來訪シ「オムスク」政府ヨリノ訓令トシテ同政府ハ夙ニ日

本政府ト最モ親密ナル關係ヲ結ハムコトヲ希望シ居リ先般一応右ノ希望ヲ日本政府ニ申通シタルコトモアリタルガ昨今一層其ノ必要ヲ認ムルコト切ナリ就テハ日本政府ヨリ「オムスク」ニ全權ヲ有スル代表者ヲ派遣セラレムコトヲ望ム現ニ同地ニ駐在スル松島田中ノ両氏ニ対シ何等不足アル次第ニハ非ルモ一々東京ヘ訓令ヲ請ハルル様ニテハ不便ニテモアリ此ノ際全權ヲ委任セラレタル駐在官ノ派出ヲ望ム次第ナリト語リタルニ付大臣ハ善ク諒承セリ本件ニ付テハ日本政府ニ於テモ既ニ考量シ居レル所ナリ差当リ日本側ヘノ交渉ハ遠慮ナク我カ總領事ニ対シ為サレタク貴説ノ如ク我總領事ニ於テ一々本國政府ニ請訓スルハ一ハ「オムスク」政府ガ未タ列國ノ承認ヲ得サル為メニ余義ナクセラルル事情モアルヘシト答ヘラレタリ

次テ露国大使ヨリ「オムスク」政府承認ノ問題ニ関シテハ曩ニ米國側ニ於テ反對アリシカ昨今「モリス」大使ノ態度ニ見ルモ承認ノ意向ナルカ如ク英仏ハ素ヨリ同意ナレハ日本ニ於テモ速ニ承認ノコトトナル様願ヒタシト述ヘタルニ付大臣ヨリ日本政府ニ於テモ夙ニ考量シ居リ速ニ事態確立シ承認ノ運ヒト成ル様希望シ居レル次第ナリト答ヘラレタ

リ

旨ルヴォフ公上田ニ談話ノ件

講第九九三號 (五月二十日接受)

上田カ貴電第三五二號ノ次第ヲ大大的ニ「リヴォフ」公ニ告ケタルニ対シ公ハ左ノ如ク語レリ

日本カ既ニ「コルチャク」ニ物質的援助ヲ与ヘ今進テ援助ノ方針ヲ確立セラレタルコトハ反「ボリセヴィキ」諸政府団体一同ノ感謝スル所ナリ最近「コルチャク」軍力着々前進シ今將ニ「カザン」ヲ占領セントスルニ至リシハ畢竟日本ノ援助ノ結果ニ外ナラサルヘシ吾人ハ物質及道德的援助サヘ受クレハ沢山ニテ兵力ノ援助ヲ必要トセス目下吾人ノ特ニ希望スル点ハ右諸政府団体ノ全露政府代表者ト定メシ「コルチャク」ヲ聯合國力速カニ承認スルコトニシテ此承認ヲ得ハ吾人ハ正式ニ諸般ノ問題ニ関シ聯合國ト談判交渉スルヲ得ヘシ聯合國ハ早晚之ヲ承認スルニ相違無キモ吾人ハ露國復興ニ関シ承認ノ急務必要ヲ感スルヲ以テ此際日本カ右承認ノ提議ヲ為シテ聯合國ヲ動かサンコトヲ希望ス復興スヘキ露國ハ日本ト極親密ノ關係ヲ保ツヲ必要トス云々

(参考)

五月十日仏国大使來訪仏国政府ハ「オムスク」政府承認ニ異議ナキ旨ヲ述ベ日本政府ノ意向ヲ尋ネタルニ付大臣ヨリ前掲露国大使ニ対スルト同様ノ挨拶ヲ為サレタリ

五一三 五月十四日 在仏国松井大使ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

オムスク政府承認ヲ日本ガ率先提議セラレ度

一六 「オムスク」政府承認問題一件 五二三

ハ「ロイド、ジョージ」ノ意ヲ忖度シ英國政府ハ近々「コ

ルチャク」政府ヲ承認スヘキ決意ヲ有スル旨ヲ報シ右決定ハ勞農政府ノ各方面ニ対スル隱謀杜絶ノ第一歩タルヘシト論セル趣ナリ

五一四 五月十六日 閣議決定

オムスク政府承認問題ニ関スル件

附記 オムスク政府承認条件ニ就キ(政務局調)

露国仮政府カ国内ノ秩序安寧恢復ノ任ニ当ランカ為メ「コ
ルチャック」提督ノ下ニ「オムスク」ニ於テ組織セラレテ
ヨリ既ニ六閱月此ノ間同政府ハ深ク用意ト決心トヲ以テ至
難ノ政局ニ処シ能ク其ノ任ニ堪ヘ更ニ最近ニ至リテハ「ア
ークエーンゼル」及「エカテリノダール」ニ於ケル政治団
体モ同政府ヲ以テ露国中央政府ト承認シタリト伝ヘラレ之
カ為メ其ノ地位ハ今ヤ一層鞏固ヲ加ヘタルモノノ如シ露国
ニ於テ速カニ穩健有力ニシテ相当永續ノ見込アル政府ノ再
興ヲ見ムコトハ聯合与国ノ等シク希望スル所ナルニ顧ミ且
列国カ公然「オムスク」政府ノ國際的地位ヲ承認スルハ適
切ニ此ノ目的ニ資スル所以ナルヲ信シ帝國政府ハ今ヤ「オ
ムスク」政府仮承認問題ヲ考量スルニ適當ナル時期正ニ到
来セルモノト思惟ス而シテ該承認ハ新政府ニ於テ「ケレン

ノ地位ヲ断念セシムルコト

ロ、右ノ通り「セ」ノ讓歩ヲ尽力スルト同時ニ樺太ノ事

業ニ関スル我希望ノ貫徹ヲ計ルコト

五一五 五月十六日 在英國永井臨時代理大使ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

日本ノオムスク政府承認ニ関スル報道ニ対シ

「マンチェスター、ガーディアン」紙ノ社説

報告ノ件

第二一三号

十二日巴里発 Times 特電ハ日本ガ「オムスク」政府承認
ノ意思ヲ聯合國ニ通告セル旨ヲ確報トシテ報ジタルガ之ニ
対シ十四日ノ Manchester Guardian 社説ハ該報道ニ対シ
テ事実ナラバ之レ極メテ重大ナル問題ニシテ日本ハ多分聯
合国ニ拔ケ駆ケシテ「オムスク」政府ヨリ東部西比利亞又
ハ蒙古ニ関シ何等カノ報償利権ヲ得ントスルモノナルベク
此結果此等地方ヲ日本ノ勢力下ニ置クコトトナルベシ本問
題ハ山東問題ト相俟チ日本ニ広大ナル市場ノ独占権ヲ与フ
ルモノニシテ列国ハ輕々ニ看過スベカラズト云ヘリ
在仏大使ヘ転電セリ

スキ」政府顛覆前露国カ負担セル國際義務及債務全部ヲ
承継スル旨ノ明確ナル保障其ノ他外国民ノ正当ナル利益擁
護ニ必要ナル条件ヲ附シテ之ヲ為スヲ可トセン

以上ノ所見ヲ責任国政府ノ考慮ニ供スルニ当リ帝國政府ハ
目下巴里ニ集合中ノ主ナル聯合与国代表者間ニ本件ヲ議ス
ルノ便利ナルヘキヲ提言セント欲ス

(欄外註記)

「大正八年五月十六日外交調査会決定」

(附記)

オムスク政府承認条件ニ就キ(政務局調)

一、承認条件ハ一般の事項ニ止メ我特殊問題ハ之ヲ条件ト
セズ別ニ解決スルコト

一、右一般の条件ノ重ナルモノハ左ノ如クナルヘシ

イ、外国人ニ対スル通商産業其他各種經濟の制限ヲ撤廃
セシムルコト

ロ、露国内地ヲ一般外国人ニ向テ開放セシムルコト

ハ、浦潮ヲ全部商港ト為サシムルコト

一、「セミヨノフ」問題ハ右承認前至急解決スルコト

イ、妥協条件ハ過般ノ閣議決定ニ從ヒ「セメヨノフ」ヲ
シテコサック首長ノ地位ヲ保持セシムルモ独立軍団長

五一六 五月十七日 在仏國松井大使ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

連合國側ニ依ルオムスク政府承認接近並ケレ

ンスキーノ米國側ニ対スル提言ニ関スル件

講第一〇二三号 (五月二十一日接受)

十六日当地新聞所報

一、諸般ノ狀況ヲ綜合スルニ勞農政府ハ「コルチャック」
軍ノ進撃ニ対抗スル事能ハズ又「ペトログラード」ノ撤退
ハ目下準備中ニ在リ反勞農軍ノ進撃ハ巴里聯合側社会(脱)
処ニシテ同軍占領区域ニ対スル食料ノ供給並「コルチャッ
ク」軍ニ対スル食料其他有力ナル經濟的援助ヲ与フルノ必
要ハ聯合側ノ話題ニ上リ又日本ハ「コルチャック」政府ヲ
承認スルノ意アリト伝ヘラレ仏國又大イニ彼ニ同情ヲ表シ
米人社会ニ於テハ「コルチャック」政府ノ反動的ニシテ或
ハ帝國主義再興ノ虞アリトセザルニ非ザルモ同様同政府承
認ノ必要ヲ認め居レリ要スルニ聯合側ノ「コルチャック」
政府承認ハ極メテ近キニ在ルモノノ如シ

二、「アレキサンドル、ケレンスキー」「ニコラス、アウグ
センチェフ」「ウラジミール、ゼンチノフ」一行ハ最近巴

里ニ到着「コロネル、ハウス」ト会見セリ在仏米大使「ワ
レース」モ列席セシガ一行ハ共和主義ノ立場ヨリ露国問題
解決方ニ関スル具体的提言ヲナセリ

註 右全文ハ五月二十六日左ノ通り転電セラレタリ

在支小幡公使宛第七一八号

在浦潮松平政務部長宛第二二二一号

(菊池総領事へモ伝ヘラレタシ)

在哈爾賓佐藤総領事宛第三三二二号

(オムスクへ転電アリタシ)

五一七 五月十八日

内田外務大臣ヨリ
在米国石井大使宛(電報)

オムスク政府仮承認問題ニ関シ米国政府ニ通

告方訓電ノ件

別電 同日内田外務大臣発在米国石井大使宛電報第三

七八号

第三七七号

「オムスク」政府仮承認問題ニ関シ今般帝國政府ハ別電第
三七八号ノ通り関係各国政府ニ提議スルコトニ決定シタ
ルニ付貴官ハ至急任国当局ニ右別電ノ趣旨ヲ面陳シ同時ニ其
覚書ヲ交付セラシテ任国政府ノ回答ヲ求メラシメ度尚右ニ対ス

ル先方ノ挨拶振り回電アリタシ

因ニ在本邦米国大使ハ本問題ニ関シ過般本大臣ノ内意ヲ尋
ネタル行懸リモアルニ付同大使ニ対シテハ特ニ五月十七日
右帝國政府決定ノ次第ヲ内告シタル所同大使ハ不取敢其要
旨ヲ本國政府ニ電報シタシト希望セルニ付同意ヲ与ヘ置ケ
リ尚同大使ハ米國政府ニ於テモ最早「オムスク」政府仮承
認ノ時期到来セリトノ意見ニ傾キ居レル旨内話セリ

本電別電ト共ニ在英仏伊大使ニ転電シ本電前段ハ本大臣ノ
訓令トシテ執行スヘキ旨申添ヘラレ尚在英大使ヲシテ本電
及別電ヲ日置及丸毛ニ参考トシテ転電セシメラレタシ但シ
丸毛ヘハ別電英文ハ要領翻訳ノ上転電ヲ要スル旨付加ヘラ
レタシ

(別電)

五月十八日内田外務大臣発在米国石井大使宛電報第三七八号

オムスク政府仮承認問題ニ関スル覚書

第三七八号

More than six months have elapsed since the Pro-
visional Russian Government has been organized at
Omsk, under the direction of Admiral Kolchak, to
undertake the restoration of order and security in Russia.

including a definite assurance on the part of the new
Government to assume all international obligations and
indebtedness undertaken by Russia before the overthrow
of the Kerensky Administration.

In bringing these considerations to the notice of
the Government to which you are accredited, the Jap-
anese Government desire to suggest that the question
might conveniently be discussed among the delegates
of the Principal Allied and Associated Powers now
assembled at Paris.

五一八 五月二十一日

在米国石井大使ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

オムスク政府承認ノ我提議ニ関シ米國國務長

官代理ト会見ノ件

第三八五号

(五月二十五日接受)

貴電第三七七号ニ関シ

五月二十日國務卿代理ニ面会ノ上説明ヲナシテ覚書ヲ手交
シタルニ代理ハ巴里ニ打電ノ上ニ於テ返答スベキモ自分ノ
感想ヲ述ブレバ日本ノ提議ニ賛成ナリ但シ「オムスク」政

It has so far borne with admirable tact and determina-
tion the most difficult task that has ever fallen upon
the lot of any Government, while its position seems
now to be further strengthened by the recognition re-
ported to have been recently accorded to it as the cen-
tral authority of Russia by the political groups at
Archangel and at Ekaterinodar.

Having regard to the known desire of all the Allied
and Associated Powers to see an early re-establishment
in Russia of an orderly and efficient Government with
reasonable promise of stability, and believing that an
official acknowledgement by foreign Powers of the
international standing of the Omsk Government will
materially conduce to that end, the Japanese Government
feel that the moment is opportune to consider the ques-
tion of provisional recognition to be extended to the
Omsk Government. The recognition might be made
subject to such conditions as may be found essential to
safeguard the legitimate interests of foreign nations,

府ヨリ仮承認後ノ政策ニ付若干ノ証言ヲ取り置キテ過激派ヲシテ露国人ニ対シテ「オムスク」政府ハ「リアクショナリー」ナリトノ攻撃ノ余地ナカラシムル必要アルベシ「オムスク」政府ハ当初守旧の傾向アル人物ヲ含メルガ近來ハ「カデット」社会革命派分子ノミトナレル模様ニ付右証言ハ實際ノ必要無カルベキモ過激派ニ辞柄ヲ与フルハ不得策ナリト述べ「モーリス」大使六月一日発西比利亞ニ行キ「オムスク」迄行クナラント附言セリ

在英仏伊各大使へ電報セリ

五一九 五月二十二日

在浦潮矢野政務部長代理ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

オムスク政府承認問題ニ関スル浦潮各紙ノ論

調報告ノ件

第二九三号

五月二十日当地各新聞ハ日本公報局発表東京電報トシテ今回日本ガ「コルチャック」政府承認ノ意向ヲ聯合側ニ通牒シタル旨並右ニ関シ東京朝日ガ「オムスク」政府承認ノ前提トシテハ同政府ガ現存各自治機關ヲ認め且国民代表機關ヲ設置セム事ヲ勧告シタル記事ヲ掲載シタルガ右ニ関シ二

相代理ト会见ノ件

第二一九号

在米大使宛電第三七七号ニ関シ二十三日外相代理ニ面会御訓令執行ス「カーゾン」卿ハ先ヅ本提議仮承認ハ全露中央政府トシテナリヤ將タ西「シベリア」丈ノ政府トシテナリヤ確知シ度シト述べタル後「オムスク」政府承認ノ儀ハ自分數日前巴里ニ在リタル節ニモ話題ニ上リタルガ「コルチャック」將軍ニ対シテハ彼ハ「レアクショナリー」ナリ彼ノ勢力ハ驕テ革命ノ効果ヲ減却スルニ至ルベシ等ノ批評ヲ為スモノアリ自分ハ其然ラザルヲ望ム者ノ一人ナルガ此種非難アル限り輕々シク承認ヲ遂行スルヲ得ズ又米國政府ノ同人ニ対スル從來ノ態度必シモ好意的ト云ヒ難ク日本政府モ寧ロ「セメノフ」ニ力ヲ入ルル等ノ事態ハ益々之ガ決行ヲ遅延セシメツツアリタルガ「コルチャック」「セメノフ」間ノ關係モ改善サレ米國政府ノ態度ニモ変化ヲ見ルニ至レル今日承認ノ時期熟シ來レルヤニ認めタル而シテ愈々承認ノ場合ニ条件トシテ重要視スベキモノニアリ第一ハ將來ノ政体ハ民意ニ諮リテ決スル事第二ハ旧露国内ニ新タニ成立セル諸國家ハ之ヲ認ムル事ナリト述べタルガ本官ノ質

一六 「オムスク」政府承認問題一件 五二一

十一日当地「エホー」紙ハ本報道ノ真否ハ別トシ朝日ガ「オムスク」政府承認ノ条件トシテ同政府ニ国民代表機關設置ノ要ヲ指摘セルハ妥当ノ論ニシテ西比利亞ノ政情今日ノ如キ混沌タルモノアルハ未ダ以テ現政府ガ与國ノ信用ヲ贏チ得ザル所以ニシテ聯合側ガ一政団ニ偏セズ国民全体ニ着眼シタルハ最注意ニ価スベキ点ナリト評シ又「ゴーロス、プリモーリヤ」ハ全露の憲法會議召集ハ今日猶望ムベカラザルモ烏拉爾以東西比利亞一帶ノ地方的緊急問題ヲ議スベキ国民議會開設ノ緊切ナルヲ論ジ政府ハ右代表機關ノ設置ニ依リ其民主主義ノ宣言ノ空約ニ非ザル事ヲ表明シ同時ニ聯合側ノ承認ヲ容易ナラシメナバ以テ外ハ國際的地歩ヲ鞏固ニシ内ハ民心ヲ鎮撫スルヲ得ベシト述べ「ダリーニ一、ヴォストーク」ハ現政府ニ就キテハ兎角ノ批評アレドモ現ニ實力ヲ有シ其施政又宣シキヲ得タルモノアリ之近キ將來ニ与國ノ承認ヲ得ベキ權利ヲ有スルニ至ラムカ云々ト論ジタリ

五二〇 五月二十四日

在英國永井臨時代理大使ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

オムスク政府承認ノ我提議ニ関シカーゾン外

問ニ対シ英國政府ハ主義上帝國政府ノ提議ニ賛意ヲ表スル旨並ニ本件ハ早速巴里ニ於テ主タル全權間ノ議ニ上ス事ニシタキ旨ヲ答ヘタルニ就キ我覺書ニ対シ右趣旨ノ覺書ヲ得タシト述べタルニ右ハ巴里ニ於テ早速議ヲ進ムルコトトセバ夫ニテ可ナルベシトノ意ヲ洩シタリ

在米伊仏各大使在瑞典公使及在露大使へ転電セリ

五二一 五月二十五日

内田外務大臣ヨリ
在米國石井大使宛(電報)

オムスク政府承認提議ニ関シ在本邦露國大使

幣原次官ニ談話ノ件

第三八八号

往電第三七七号ニ関シ我提議ノ内容ハ五月二十日在本邦英米仏伊四國代表者ニ示シタルカ二十一日在本邦露國大使或宴會ノ席上幣原次官ニ邂逅ノ際我提議ノ実否ヲ尋ネタルニ依リ事實ナル旨答ヘ置キタリ次テ二十三日同大使次官ヲ來訪シ右提議ニ関シ予メ同大使ニ内報セサリシコトヲ不滿トスル意ヲ洩ラシタルニ依リ次官ハ昨今外國新聞例ヘバ「マシチエスター、ガーヂヤン」ノ如キ日本ハ「オムスク」政府承認ノ前提トシテ利權獲得ニ関シ先ツ同政府ト秘カニ協

定ヲ遂ケタルモノノ如ク伝フルモノアル際日本政府ガ予メ本件提議ヲ「オムスク」政府又ハ露国大使ニ内報スルトキハ我公正ナル真意ニ疑惑ヲ招キ日露双方ノ為不利ヲ醸スヘキコトヲ顧慮シ故サラニ右内報ヲ差控ヘタル次第ナル旨答ヘタル処同大使ハ篤ト諒解シタル旨ヲ述ヘ引取りタリ御参考迄

(石井大使ニハ)

右在英仏伊大使ニ転露シ在英大使ヲシテ日置丸尾ニ転電セシメラレタシ

註

右ハ同日左ノ通り転電セラレタリ

在支小幡公使宛第七一四号(奉天経由)

在浦潮矢野政務部長代理宛第二二六号

(菊池ヘ転達アリタシ)

在哈爾濱佐藤総領事宛第三二四号(長春経由)

(松島ヘ転電アリ度シ)

五二二 五月二十六日

在仏国松井大使ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

露国問題ニ関スル連合五大国ヨリ「コルチャツク」提督宛電信案ニ付米國大統領邸ニ於ケル五大国各代表者協議ノ件

「ヨージ」氏ハ開戦後ノモノモ含ムト記憶スト答ヘタリ(但シ其ノ後右宣言写別電第一〇九八号ヲ取寄セ閱読ノ結果開戦前後ヲ問ハス総テ包含ストノ見解ニ一致シタリ)次ニ大統領ハ前頭電信案ニ対スル我方ノ意見ヲ求メタルヲ以テ珍田委員ハ該案ハ出席前ニ送付ヲ受ケ十分熟読スルノ違ナキモ自分一己ノ一応ノ意見トシテハ帝國政府ニ於テ大体異存ナカルヘシト思考ス現ニ帝國政府ニ於テハ「コルチャツク」政府承認方ニ付キ四國政府ヘ提議ヲ為シツツアル次第ナリトテ単ニ「インフォメーション」トシテ在米大使宛貴電第三七八号ヲ一読シタル後「コルチャツク」ニ宛本件電報ヲ發送スル趣旨ハ畢竟同提督ノ政府ヲ承認スルニ先タツ予備ノ手續ト見ルヘキモノト思惟スト述ヘタルニ大統領及「ロイド、ジョージ」氏共ニ其ノ通りナリト答ヘタリ
珍田委員ハ進ムテ猶ホ一、二明瞭ニシ置キタキ点アリトテ第一ニ「コルチャツク」政府ニ与フヘキ軍需品食糧等ニ関スル援助ニ付テハ勿論各關係國ノ事情及資力ノ程度ヲ斟酌シテ決定セラルヘキ義ト思考スト述ヘタルニ「ロイド、ジョージ」氏ハ各國ニ於テ国力相応ニ分担セラルルコトナラハ好都合ナルガ従来ノ經驗ニ拠レハ主トシテ英國ヨリ供

別電 同日在仏国松井大使兼内田外務大臣宛電報講第

一〇九九号

右電信案

講第一〇九七号

(五月三十日接受)

五月二十四日午後急ニ「ウィルソン」大統領邸ニ於テ露国問題ヲ議スル旨通知シ同時五大國ヨリ「コルチャツク」提督ニ宛發送スヘキ電信案別電第一〇九九号ヲ送付シ来レリ当日ハ重要ノ会合ナキ筈ニテ牧野委員ハ占領地視察ニ赴キ不在ナリシヲ以テ珍田委員列席シ大統領ノ外英仏伊各首相列席ス

大統領ハ先ツ我ニ向ヒ露国問題ヲ考慮中ナルカ日本ト協議ヲ經シテ同問題ヲ決定スルコト能ハサルハ勿論ノ義ナルヲ以テ御出席ヲ求メタル次第ナリト前置シタル後右電信案ノ要領ヲ朗読説明シタルニ付珍田委員ハ案文中ニ引用セル一九一八年十一月二十七日付「コルチャツク」ノ宣言トハ如何ナルモノナリヤ承知致度ト質問セルニ大統領ハ右宣言ノ趣旨ハ要スルニ戦前露國ノ有セル債務ヲ全部承認スルニ在リト述ヘ珍田委員ヨリ果シテ開戦後ノモノハ含マサルヤ開戦後「ケレンスキー」政府ノ覆没迄ノ分ヲ含ムト否トハ日本ノ利益ニ最重要ノ問題ナリト述ヘタルニ「ロイド、ジ

給シ居ル次第ナリト云ヒ各國ノ分担等ニ付テハ別段際立タル協議ヲ要セズ單ニ實際ノ便宜ニ從ヒ必要ノ措置ヲ執ルヘキ覚悟ナルカニ見受ケラレタリ從テ右分担ニ付テハ我ニ於テ實際迷惑ニ感スルカ如キコトナカルヘシト信ス

珍田委員ハ更ニ電信案前段ニアル and the help such as may volunteer for their service ノ文字ニ付日本ハ西比利亞ニ軍隊ヲ派遣シ居リシヲ今後軍事上ノ援助ヲ与フル事トナル場合ニ於テモ志願兵ヲ以テスルコトハ事實上差支アルヘキヲ以テ文字通ニ実行スルヲ得サルトキニ付其点ハ予メ承知シ置カレタシト述ヘタルニ「ロイド、ジョージ」氏ハ英國ニ於テハ此上一軍隊ヲ強制的ニ露國ニ派遣スル事ハ不能ニシテ強ヒテ之ヲ実行セントセハ必ス軍隊内ニ騷擾ヲ惹起スヘク到底志願組織ニ依ル外方法ナシト英國ノ事情ヲ説明シタリ此時大統領ハ自分ハ将来露國ニ外國軍隊ヲ派遣セサル事ト了解シ居ル次第ニシテ此処ニ問題トナレルハ外國軍隊ノ派遣ニ外ナラスシテ「コルチャツク」政府自身ノ組織スル軍隊内ニ外國ノ義勇兵ノ加ハルヲ云フモノナリ尤モ現ニ西比利亞ニ在ル日米兩國軍ノ如キハ畢竟地方ノ秩序維持ノ為ニ外ナラサルカ故ニ本件トハ全然没交渉ナリ結局問題

ノ措辞ハ疑義ヲ生スルノ恐アルヲ以テ之ヲ削除シ単ニ and other help ト改ムル事ヲ提議セリ然レトモ「ロイド、ジョージ」氏ハ其レニテハ反テ志願兵ニ依ラサル軍事上ノ援助ト解セラルル事ナキヲ保シ難キニ付寧ロ全然此一節ヲ削除シ志願兵ニ依ル援助ハ将来ノ問題トスル事然ルヘシトノ意見ヲ陳述セリ

本件電信ハ出来得ル限り速ニ発送シタキ四国側ノ希望ニテ二十五日我確答ヲ与フルコトヲ約束シ我方ニ於テ同意ノ上ハ五国代表者署名ノ上「コルチャック提督ニ宛發電シ其發表ヲ「デニキン」及「アルハンデル」政府ニ電報スルコトニ協議セリ

尚当日難談中「コルチャック」ノ人物評出テタル処大統領及「ロイド、ジョージ」氏ニ於テハ同人カ果シテ自由思想ヲ以テ民主的ノ政府ノ基礎ヲ確立スルニ適當ナリヤニ付多少不安ノ意ヲ有スルヤニ推察セラレタリ將又「ロイド、ジョージ」氏ハ「コルチャック」ヨリ満足ナル回答ヲ得同人ノ政府ヲ承認スルコトナリタル場合ニ於テモ同政府ヲ全露ノ政府トシテ承認スヘキヤ又ハ単ニ同人カ權力ヲ樹立セラル地方ノ政府トシテ承認スヘキヤハ更ニ講求スヘキ問題ナ

リト云ヘリ

右ノ次第ニテ本件電報ハ結局「コルチャック」承認ノ第一歩トシテ承認問題ニ関スル御訓令ノ趣旨トモ何等背馳セサルヲ以テ西園寺牧野始各委員協議ノ上二十五日同意ノ旨確答セリ

在英米伊ヘ転電セリ

註 右全文ハ六月二日左ノ通り転電セラレタリ

在蒲潮松平政務部長宛第三三七

在哈爾濱佐藤總領事宛第三五〇号

(オムスクヘ転電アリタシ)

在支小幡公使宛第七四一号

尚在仏松井大使ニ対シテハ往電第四五七号ヲ以テ日置公使及九毛ヘ転電取計方電報セラレタリ

(別電)

五月二十六日在仏国松井大使宛内田外務大臣宛電報講第一〇九号

連合五大国ヨリ「コルチャック」提督宛電信案

講第一〇九九号

同盟及聯合諸国ハ露国ニ対シテ執ラントスル政策ヲ再ビ茲ニ宣明スルノ必要ナル時機到来セリト信ズ

抑モ露国ノ国内問題ニ対スル干涉ハ之ヲ回避スベキコトハ

同盟及聯合諸国ニ於テ常ニ其政策ノ根本原則ト為シ来リタル処ナルカ先般初メテ干涉ノ舉ニ出デタルハ畢竟独逸ノ專制政治ニ對抗シテ鬭争ヲ続行シ以テ露国ヲシテ独逸ノ統治羈伴ヨリ脱セシメントスル露国内ノ各分子ヲ援助シ併セテ過激派軍ノタメ壊滅ノ危険ニ瀕シ居リタル「チェッコスロヴァック」ヲ救済センガ為メ外ナラザリシナリ此等諸国ハ一九一八年十一月十一日休戦条約調印以來其軍隊ヲ露国ノ各地ニ駐屯セシメ又彼等一味ノモノヲ救済センガ為メ軍需品其ノ他ノ需品ヲ送付シ其額頗ル多キニ達シタリ而シテ平和會議開始ト同時ニ此等諸国ハ露国問題ノ恒久的解決ヲ遂ゲ度キ希望ヲ以テ露国内ニ於テ互ニ相争ヘル一切ノ政府代表者ヲ招キテ会合シ以テ露国ニ平和ト秩序ノ再現ヲ計ラシメ努力スル処アリタリ然ルニ本提議及其後露国内百万ヲ以テ算スル罹災者ノ困苦ヲ救済センガ為ニナサレタル提案ハ勞農政府ガ救済ニ関スル商議又ハ事業進行中ハ敵対行為ヲ中止スベシトノ根本的条件ヲ受諾セザル為メ遂ニ失敗ニ帰シタリ同盟及聯合諸国ハ干涉ヲ繼續スルモ速ニ問題解決ノ見込ナシトノ理由ヲ以テ露国ニ於ケル其軍隊ヲ撤退シ且ツ此ノ上ノ経費支出ヲ止ムル様要請セラレツツアル次第

ナルモ此等諸国ハ露西亜人民ヲ自由ト自治ト平和トニ導キ得ルモノトセバ左記ノ方針ニ従ヒ其援助ヲ繼續セントス同盟及聯合諸国政府ハ露国ニ於ケル平和ノ克復ヲ以テ其ノ政策ノ目的トセル所以ハ露国民ヲシテ自由ニ選舉セラレタル憲法議會ニ依リ其ノ國務ヲ処理スル実権ヲ回復シ國際聯盟ノ平和的仲裁裁判ニ依リ露国々境及ビ其ノ隣邦トノ關係ニ関スル紛争ノ解決ヲ計リ以テ同国々内ノ平和ヲ尊重スルニ至ラシメントスルニアルコトヲ公然茲ニ声明ス同盟及聯合國ハ客年ノ經驗ニ照シ在「モスコ」勞農政府ト商議ヲ重ヌルモ到底前記ノ目的ヲ達スルコト能ハザルベシト確信ス依テ前記諸国ハ「コルチャック」提督及其ノ党与ノ組織セル政府ニ対シ同政府ノ政策カ同盟及聯合國ノ政策ト其ノ目的ヲ一ニスルモノナリトノ確固タル保障ヲ得ルニ於テハ之ニ対シ軍需品食料品及ビ其ノ他ノ需品ヲ供給シ以テ彼等カ全露ノ政府トシテ確立セラル、様之ニ対シ援助ヲ与ヘントス

前記諸国ハ右ノ目的ヲ以テ「コルチャック」及ビ其ノ党与ニ対シ彼等カ同盟及聯合諸国ヨリ引續キ援助ヲ受クル条件トシテ左記諸項ノ件ヲ承諾スルヤ否ヤニ関シ敢テ其ノ所見

ヲ叩カントス

第一、彼等ガ「モスコ」ニ達スルヤ直ニ露国ノ最高立法機関トシテ自由秘密且ツ民主的の投票ニ依リ選挙セラレ之ニ対シ露国政府ガ責任ヲ有スベキ憲法議會ヲ召集スルコト或ハ(脱)新ニ選挙ヲ行ヒ得ル時期ニ達スル迄ハ一九一七年ニ選挙セラレタル憲法議會ヲ召集スルコト

第二、現在彼等ノ管下ニアル地方ニ於テハ市会州会等ノ如キ一切ノ地方議會ニシテ適法ニ組織セラレタルモノニ対シテハ普通自由選挙ヲ許容スルコト

第三、彼等ハ露西亜ニ於ケル階級又ハ門族ノ特權ヲ復活セシメントスル一初ノ計画ニ対シ何等援助ヲ与ヘサルヘキコト

同盟及聯合國ハ「コルチャック」提督及其ノ党与ニ於テ旧時ノ土地制度ヲ回復スルノ意志ヲ有セストノ厳格ナル宣言ヲナシタルコトハ頗ル満足トスル処ニシテ本件並ニ其ノ他ノ国内問題ノ解決ニ際シ執ルヘキ主義ノ決定ハ一ニ之ヲ露西亜憲法議會ノ自由審議ニ委セザルベカラスト思考スルモ同盟及ビ聯合諸国ハ今ヤ其ノ援助ヲ与ヘントスル「コルチャック」一派ニ於テ露西亜人一切ノ行政上及宗教上ノ自由

ヲ擁護シ且ツ一度ビ革命ニ依リ崩壊セラレタル制度ヲ復活セシムル計画ヲ為サザルベシトノ保証ヲ得ンコトヲ希ハサルヲ得ス

第四、「フィンランド」及波蘭ノ独立ヲ承認スルコト此等諸国ノ境界及統治ニ関スル問題ニシテ妥協ニ依リ解決ヲ見サル場合ニ於テハ之ヲ國際聯盟ノ仲裁裁判ニ附託スルコト第五、「エストニア」「ラトヴィア」「リトアニア」及「カウカシア」及「トランス、カスピアン」地方ト露西亜トノ關係ニシテ速ニ妥結シ得ザル場合ニハ國際聯盟ト協議戮力シテ其ノ解決ヲ計ルヘク而シテ右解決ヲ見ル迄ハ露西亜政府ハ此等ノ地域ヲ自治体トシテ承認シ此等事実上ノ政府ト同盟及聯合諸国政府トノ間ニ存在スル關係ニ適応スル態度ヲ執ルベキコト

第六、露西亜政府ガ民主的基礎ノ上ニ組織セラルルト同時ニ露西亜ハ國際聯盟ニ加入シ全世界ノ軍備及軍事組織制限ノ件ニ関シ他ノ聯盟国ト協同動作スヘキコト

第七、最後ニ彼等ハ露国々債ニ関シ一九一八年十一月二十七日「コルチャック」提督ノ為シタル宣言ヲ遵行スヘキコト同盟並ニ聯合諸国ハ「コルチャック」提督並其ノ党ノ政府

在哈爾濱佐藤總領事宛第三六六号

(オムスクへ転電アリタシ)

在支小幡公使宛第七七三号

五二四 五月二十八日

菅野軍務局長ヨリ
塩原政務局長宛

オムスク政府へ軍需品供給ニ関スル閣議決定

二付通牒ノ件

附屬書 五月十六日閣議決定

軍事発第四一号

(五月廿八日接受)

大正八年五月二十八日

陸軍省軍務局長 菅野 尚一

外務省政務局長 塩原 正直殿

オムスク政府へ軍需品供給ニ関スル件通牒

首題ノ件ニ関シ別紙ノ通閣議決定相成候条及通牒候也

(附屬書)

五月十六日閣議決定

「オムスク」政府へ軍需品ノ供給ニ就テ

一 「オムスク」政府ハ近キ将来ニ於テ承認セラルヘキニ

就テハ今後同政府ノ希望スル軍需品ハ勉メテ之ヲ供給ス

右軍需品供給ノ手続左ノ如シ

カ此等条件ヲ受諾スルノ準備アリヤ若シ之ヲ受諾スルトセバ軍事状態ノ許ス限リ速ニ単一ノ政府及軍司令部ノ組織ヲ為スベキヤ成ルベク速ニ之ヲ知ランコトヲ欲ス

註 右全文ハ六月七日左ノ通り転電セラレタリ

在浦潮松平政務部長宛第二四六号

(菊池總領事へモ伝ヘタタシ)

在哈爾濱佐藤總領事宛第三六五号

(オムスクへ転電アリタシ)

在支小幡公使宛第七七二号

五二三 五月二十八日

在仏国松井大使ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

コルチャック宛ノ共同通牒ニ一項目追加ノ件

講第一一一四号

(六月一日接受)

往電第一〇九九号「コルチャック」宛電信案ハ其後五月二十七日五大国最高會議ニ於テ第六項トシテ左ノ通り追加シ旧第六項ヲ第七項トスルコトナレリ

第六「ベッサレビア」中「ルーマニア」ニ属スル部分ノ將來ノ決定ハ平和會議ノ權限ニ属スルコトヲ承認スルコト

註 右全文ハ六月七日左ノ通り転電セラレタリ

在浦潮松平政務部長宛第二四七号

(菊池總領事へモ伝ヘラレタシ)

一六 「オムスク」政府承認問題一件 五二三 五二四

一六 「オムスク」政府承認問題一件 五二五 五二六

- 一 「オムスク」政府ハ帝國外務省ニ対シ申込ヲ為ス
- 二 外務省ハ之ヲ陸軍省若ハ海軍省ニ移ス
- 三 陸軍省若ハ海軍省ハ大蔵省ト協議ノ上応否ヲ決定シ閣議ノ承認ヲ經テ供給ヲ為ス

二 「オムスク」政府ニ供給シタル軍需品諸費ハ同政府ニ対スル債權トシテ後日其ノ償還ヲ受クルモノトス

三 「オムスク」政府ニ対スル軍需品供給ニ伴ヒ陸軍省及海軍省ニ於テ必要避クヘカラサル經費ハ差向キ臨時軍事費ヨリ之ヲ支出ス

註 右ハ五月十六日陸軍大臣ヨリ閣議ニ申請シ決定セラレタルモノナリ

五二五 五月二十八日 在英國永井臨時代理大使ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

連合国ニ依ルオムスク政府承認ノ動キニ対スル英國新聞論調ノ件

第二二四号 (五月三十日接受)

四大国会議ハ「コルチャック」政府承認ノ歩ヲ進メツツアリトノ巴里通信本月二十七日ノ当地新聞ニ掲載セラレ諸新聞之ニ論評ヲ加ヘタルガ自由黨系ノ新聞ハ之ヲ以テ反動政

五二二

府ヲ助クルモノトシテ非難シ特ニマンチエスターガージア
ン」ハ之本年始過激派政府代表者ヲ平和會議ニ招致セムトセル「ロイドジョージ」氏對露政策ノ失敗ニシテ仏国外交ノ勝利ナリトセリ反之保守黨系新聞ハ爾來露国各地ニ於ケル對過激派運動ノ著シク改善進歩セル際其中心タル「オムスク」政府ヲ承認スルハ極メテ機宜ヲ得タルモノナリト異口同音ニ贊意ヲ表シ特ニ「ロイドジョージ」氏機関ト看做サルル「クロニクル」ハ二十七日ノ社説ニ於テ熱心ニ承認歡迎ヲ慫慂シ更ニ翌日ノ社説ヲ以テ巴里會議ノ同政府承認ニハ条件ヲ附シ居レル処之ガ為此際承認ヲ遅延スルハ大局上極メテ不利ナル旨ヲ論セリ

五二六 五月三十一日 在浦潮松平政務部長ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

オムスク政府承認ノ形式ニ関シエリオット高等并務官ト談話ノ件

第三〇六号 (六月一日接受)

過日「エリオット」ニ面会ノ際「オムスク」政府承認問題ニ言及セルガ同氏ハ承認ノ形式ニ二アリ一ハ全露假政府トシテ認ムルト他ハ「オムスク」政府ガ現実ニ勢力ヲ有シ居

ル地域ニ於ケル事実上ノ政府トシテ認ムルコト之ナリ日本政府ハ何レノ形式ヲ採ラルル積リナルヤト問ヒタルニ付本官ハ帝國政府ハ先ツ主義トシテ「オムスク」政府承認ヲ提議シタルモ右承認ノ形式其ノ他ノ細目ニ関シテハ聯合國ト協議ノ上決定スルモノト思考スル旨答ヘ置キタルガ「エリオット」ハ本官ノ問ヒニ対シ第二ノ形式ニ適スルモノト思考スル旨申シ居リタリ
オムスクヘ転電セリ

五二七 六月五日 在ハルビン佐藤總領事ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

聯合側五大国代表ノ通告ニ対スルコルチャックノ回答公表セラレタル旨松島總領事報告ノ件

第五三六号 (六月九日接受)

松島總領事ヨリ閣下ヘ

第一一一号

巴里ニ於ケル五国代表者ノ署名セル通告ハ六月三日最高執政官ニ到達シタルガ同通告ハ承認問題ト直接關係ヲ有セザルモ正当ナル露国ニ対スル親善ノ意思及ビ過激派トノ關係断絶ノ決意ヲ表明スルモノニシテ之ニヨリ聯合國ト露国政

府トノ意見交換ノ途開カレタル旨竝右ニ対スル回答ハ同月三日夜発セラレタルガ同回答中ニハ已ニ幾度カ声明セラレタル政府ノ根本政策ヲ陳述セル旨六月五日公表セラレタリ右ニ関シ外務大臣代理ノ本官ニ語ル処ニ依レバ右通告ハ非常ノ長文ナルカ要スルニ列國ノ露国ニ対スル親善ノ意思ノ表明及露国將來ノ政策ニ対スル希望条件ノ提示ニシテ「オムスク」政府ハ只一点ヲ除クノ外右希望条件ヲ承諾シタリ右一点トハ他日「オムスク」政府ガ莫斯科ニ入ル暁国内ノ秩序回復スルニ至ラズ從テ速カニ憲法議會ヲ召集スル能ハザル場合ニハ一九一七年「チエルノフ」ヲ議長トシテ召集セラレタル憲法會議ヲ召集スベシトノ条件ナルガ元來同議會ハ過激派ノ勢力ノ下ニ召集セラレタルモノナルノミナラズ同議會議員ノ多数ハ目下過激派ニ投ジ多クハ之ニ接近シ居ル有様ニ付露国政府ハ到底此条件ヲ承諾スル能ハザル旨回答セリトノコトナリ本件ニ関スル文書寫出来次第極秘トシテ本官ニ送付ノ答ナリ
松平政務部長ヘ転電ス

五二八 六月六日 在オムスク松島總領事ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

一六 「オムスク」政府承認問題一件 五二七 五二八

聯合側五大国代表ノ通告ニ対スルコルチャク

回答ノ要点報告ノ件

第一一三三

(六月七日接受)

往電第一一一号ニ関シ

「コルチャク」回答ノ要点左之通

一、過激派掃蕩ノ曉憲法議會選挙ノ期日ヲ定ムベシ且下委員会ハ普通選挙権ノ基礎ニ於テ選挙ノ準備ヲナシツアリ予ハ政権全部ヲ憲法議會ニ譲リ之ヲシテ自由ニ政体ヲ定メシム可ク又露国民ヲシテ自由ニ其意志ヲ發表シ得シムル為全力ヲ過激派掃蕩ニ致スベシ過激派トノ戦争ノ長引ク丈ケ此時期ノ到来遅ルル訳ナルガ去リトテ政府ハ一九一七年ノ憲法議會召集ハ之ヲ承認スル能ハズ(理由ハ往電第一一一号所載ノ通り)露国ノ内政外交問題ヲ決スルノ主權ハ正当ニ選挙セラレタル憲法議會ニ属セザル可ラズ

二、露国政府ハ各国民ノ平和的自由發展軍備制限戦争予防方法等國際聯盟ニ依リ表現セラレタル思想ニ準拠シ列国ト國際問題ヲ協議スベシ然レトモ最後ノ決定權ハ憲法會議ニ属スルコト勿論ナリ露国ハ将来トモ民主的タル可ク國境問題及對外關係ハ總テ憲法會議ニ依リ決セラル可シ

国代表ヨリコルチャクニ申送レル趣旨ノ通告

ニ対シ北露政府回答ノ件

丸毛ヨリ大臣へ

(六月十日接受)

第八九号

協商側政府ノ「オムスク」政府承認問題ニ付「クレマンソー」ヨリ「コルチャク」ニ申送レル趣旨ヲ北露政府ニ通告スヘキ旨仏政府ヨリ在當地仏代理大使ニ訓令アリ右通告ニ対シ六月二日「ミルレル」將軍ヨリ同代理ヘノ回答要領左ノ通

一、協商側政府力在莫斯科「ボルシェヴィク」政府トノ交渉ニ依リ露国内ニ於ケル平和ヲ回復シ能ハサルコトヲ確認セラレタルハ北国政府ノ最満足スルトコロ

二、北露政府ハ「オムスク」政府ヲ全露政府ト認メタルニ付協商側政府力「コルチャク」政府及反「ボルシェヴィク」政府加担者ヲ援助セントノ提議ハ北露政府力本来深甚ノ望ミヲ属スルトコロ

三、「コルチャク」ノ宣言ニ基キ協商各国力同政府ヲ全露政府トシテ認ムルハ露国人民全体ノ希望ニ合シ其結果露国ノ地位ヲ鞏固ニシ尚平和ノ回復ヲ促進スヘキコト

一六 「オムスク」政府承認問題一件 五三〇

三、世界戦争ノ当然ノ結果トシテ露国政府ハ波蘭ノ独立ヲ確認スルモ其國境確定ハ憲法議會ノ定ムル処ニ依ルベシ又政府ハ芬蘭政府ヲ承認セントスルモノナルモ其最後ノ決定ハ憲法議會ニ属ス可シ

四、「エストニア」「ラトヴィア」「リチュアニア」竝高架索「トランス、カスピアン」地方ニ対シテハ政府ハ已ニ自治ヲ与フルコトニ決シ居レリ而シテ問題ノ解決困難ナル場合ニハ國際聯盟ノ仲介ニ依ラントス「ベッサラビア」ニ関シ亦同ジ

五、更ニ一九一八年十一月二十七日ノ宣言ヲ声明ス

六、内政問題ニ関シテハ露国政府ハ一九一七年一月以前ノ制度ニ復帰セザルハ勿論農民土地所有權問題ニ重キヲ置キ地方自治団体ノ發達ニ努力スヘシ

七、人種宗教ノ別ナク各人同一ノ保護ヲ受クベシ

右回答全文郵送ス

松平政務部長へ転電済ナリ

五二九

在仏国松井大使ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

聯合側政府ノオムスク政府承認問題ニ付五大

四、協商諸國提議ノ細目ハ尚審議ノ必要アルモ北露政府ハ該提議力大体「コルチャク」政府ノ宣言及左記ノ点ニ於テ北露政府ノ意見ニ符合スルヲ喜ブコト

a、「コルチャク」政府ハ仮性質ヲ帶ヘルコト

b、旧政府ハ勿論總テ憲法議會ニ依リ發表セラルル人民ノ自由意志ニ基カサル政体ヲ設ケサルコト

c、国内ノ秩序回復ヲ待チ直ニ民主的且自由主義ノ投票ニ依リ選出セラルル憲法議會ヲ召集シ露国内各民族ニ關スル一切ノ問題ハ之ヲ民族ノ代表者ト憲法議會トノ間ニ処弁スルコト

五三〇

在ハルビン佐藤總領事ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

オムスク政府仮承認ニ關スル日本ノ提議ニ対シ同政府外相代理談話松島ヨリ報告ノ件

第五三八号

(六月九日接受)

松島ヨリ閣下へ

第一〇四号

佐藤總領事宛貴電第三一一号ニ関シ之ニ関聯スル電報今日ニ到ル迄接到セズ非常ニ苦ミ居タル折柄在英大使電報第二

一三号及在仏大使電報講第九九三号ノ転電ニ接シタルヲ以テ五月二十八日外務大臣代理ニ面会シ右貴電ノ趣旨ヲ伝ヘタル処同代理ハ本件ニ就テハ数日前在日本露国大使ヨリ電報アリ「オムスク」政府ハ同政府承認ニ関シ帝國政府ガ執ラレタル措置ニ対シ深ク感謝シ居ル旨ヲ述べ債務承継ニ関スル保障ハ既ニ客年十一月二十七日ノ政府宣言ヲ以テ之ヲ与ヘアルモ尚此際「オムスク」政府ハ旧政府同様ニ露国ガ負担セル国際義務及債務ヲ承継スベキ旨仏国代表者ヲ経テ巴里ニ電報シタリト語レリ

右松平ヘ転電セリ

五三一 六月九日 日本外務省ヨリ
在本邦露国大使館宛

本邦式小銃用彈藥五十万発入手方オムスク政
府ヨリノ申出ニ関シ回答ノ件

帝国外務省ハ「オムスク」政府ヨリノ申出ニ係ル本邦式小銃彈五十万発入手方ノ件ニ関シ四月二十八日附露国大使館ノ来示ニ接シ早速陸軍省ヘ照会シタル処今般同省ヨリ其ノ供給方取計ヒ置キタル旨回報ニ接シタルニ付右露国大使館ヘ通報スルノ光榮ヲ有ス

大正八年六月九日 於東京

五三二 六月十三日 在仏国松井大使ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

巴里首相會議ニ於テコルチャク承認問題ニ関
シ牧野全權發言ノ件

別電 同日松井大使宛内田外務大臣宛電報講第一三一
二号

講第一三一一号 (六月十七日接受)

六月十二日独逸対案ニ対スル回答案審査決定ノ為首相會議開会ノ際牧野全權列席セシニ「コルチャク」ト聯合國側トノ間ニ交換セル電報往復發表ニ付日本ノ意向ヲ尋ネタルヲ以テ此機ニ於テ「コルチャク」ニ対スル帝國ノ方針ニ成ルヘク近カシムルノ目的ヲ以テ牧野全權ハ同會議ニ対シ此際之ト同時ニ「コルチャク」ノ回電ニ対スル聯合國側ノ態度ヲモ伴セテ發表スルノ要アルヘキヲ注意シタルニ「ロイド、ジョージ」之ニ贊シ午後ノ會議ニ於テ英國側ニテ作製シタル「コルチャク」回電ニ満足スル旨ノ單簡ナル別文ヲ提議セシカ會議ハ之ヲ容レ別電ノ通「コルチャク」宛電報スルコトトナリ且「コルチャク」援助ノ趣旨ヲ明白ニセリ

尚十三日朝ノ各新聞紙ハ右聯合國側回答ヲ掲載セリ

右談話中牧野全權ハ帝國政府ハ回答文ヨリモ更ニ一步ヲ進メタル意味ニ於テ援助ヲ与フルモ差支ナキ意向ナリト述ヘタルニ「ロイド・ジョージ」ハ日本ハ「コルチャク」政府ヲ全露西亞政府トシテ認ムル意志ナリヤト問ヒタルニ付區域ニ就テハ明確ニ斷言シ難キモ「オムスク」政府ヲ「ド、ファクト、ガバンメント」トシテ承認スル意味ナリト答ヘタルニ然ラハ事實ニ於テハ格別ノ相違ナカルヘシト言ヒタリ尚首相ノ意向ヲ察スルニ万一ノ場合「コルチャク」カ果シテ全露西亞ヲ統一シ得ヘキヤ否ヤニ付テ疑惑ヲ懷キ居ルモノト観取セリ

英米伊ヘ転電セリ

(別電)

六月十三日在仏国松井大使宛内田外務大臣宛電報講第一三二
号

コルチャクノ回答ニ聯合側満足ナル旨ノ回電案

The Allied and Associated Powers wish to acknowledge receipt of Admiral Kolchak's reply to their note of May 26th.

They welcome the tone of that reply which seems

一六 「オムスク」政府承認問題一件 五三三

to them to be in substantial agreement with the position which they had made and to contain satisfactory assurances for the freedom, self-government and peace of the Russian people and their neighbours.

They are therefore willing to extend to Admiral Kolchak and his associates the support set forth in their original letter.

英米伊ヘ転電セリ

Matsui

五三三 六月十九日 内田外務大臣ヨリ
在仏国松井大使宛(電報)

コルチャク政府承認問題ニ付連合國側首脳ノ

意向打診方訓電ノ件

講第五〇八号

貴電講第一〇九七号ニ依レハ「ウィルソン」「ロイド、ジョージ」氏等ニ於テモ五月二十七日聯合側ノ第一回対「コルチャク」政府通牒ハ同政府ニ対スル承認ノ予備手續ナル旨述ヘタル趣ナル処貴電講第一三二二号ニ依レハ第二回対「コルチャク」通牒ハ単ニ同政府ニ対シ支持ヲ与フヘ

キコトラ声明セルニ止マリ帝国政府ノ提議セル承認ノ問題ニハ何等言及スル処ナシ右ハ目下未タ本問題ヲ決定スルノ時機ニ達セサルモノト認メラレタル次第ナリ又ハ本問題ハ不日更メテ審議ニ附セラルヘキ予定ナリヤ帝国政府ハ其ノ提議中ニ開陳セル如ク露國ノ為並聯合國共通ノ利益ノ為成ルヘク速ニ「コルチャック」政府ヲ露國仮政府トシテ承認シ其ノ地位ヲ鞏固ナラシムルコトニ重キヲ措クモノナルニ付必要ナラハ更ニ右提議ニ対スル重要聯合國首相ノ意向ヲ確メ委曲電報アリタシ

五三四 六月三十日 在仏国松井大使ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

コルチャック政府承認問題ニ付牧野全権ヨリ

英国首相ノ意向打診ノ件

講第一四九六号

(七月四日接受)

往電第一四九五号ニ関シ

「コルチャック」政府承認ニ対スル帝国政府ノ意向ハ首相議會散会前更ニ之カ徹底ヲ計リタシト存ジ牧野全権ハ二十八日条約調印ノ日ヲ機トシ先ヅ露西亜問題ニ対シ之迄最モ多ク発言セシ「ロイド、ジョージ」ニ向ヒ「コルチャック」

支持ハ既ニ聯合側ニ於テ決定済ミノ処ナルガ此ノ際一歩進メ同政府ヲ承認スルコトセバ同政府ノ立場ヲ強メ露西亜統一上一進境ヲ見ル次第ナルベク日本政府ノ趣旨モ全然玆ニアリ貴見如何ト述ベタルニ「ロイド、ジョージ」ハ露國各方面ヨリノ報道ニ付当局ノ意見ヲ徴シタルニ「コルチャック」軍最近ノ形勢余リ面白カラズ到底予期ノ如ク速ニ効果ヲ挙げ得ルノ見込ツカズ從テ同政府承認ノ如キモ時機尚早キノ嫌アリト答ヘタルニ付牧野全権ハ然ラバ「コルチャック」支持ノ方針ニ何等變更ヲ来シタル次第ナリヤト反問セラルニ「ロイド、ジョージ」ハ「コルチャック」支持ノ既定方針ニハ何等ノ變更ヲ来サズ飽マデモ出来得ル丈ノ救助ヲ供与スル積リナルモ「コルチャック」支持ニ決シタル時ノ情勢ト今日トハ變更アルヲ以テ今暫ク形勢ヲ見タキ考ヘナリト述ベタリ仍テ散会間際ニ本問題ヲ更ニ他ノ首相ニ持出スモ一致ヲ得ル見込ナシト見タルニ付之ヲ見合セ他日ノ機會ニ讓ルコトトセリ尚右会談ノ結果牧野全権ハ「コルチャック」政府成功ニ対スル英國側ノ信任ハ同政府支持ニ決シタル當時ニ比シ大分薄ラギタルヤノ印象ヲ受ケタリ

英米へ転電セリ

五三五 七月四日

内田外務大臣ヨリ
在オムスク松島總領事
在ハルビン佐藤總領事
在浦潮松平政務局長

モリス在日米國大使ノオムスク視察旅行ニ付

便宜供与方及接觸方訓電ノ件

第五一号(オムスク宛)

第四一四号(哈爾賓宛)

(チタ及イルクーツクへ転電アリタシ)

第二八三号(浦潮宛)

(菊池へ伝ヘラレタシ)

七月三日在本邦米國大使モリス氏本大臣ヲ來訪シ先頃西比利亞行ヲ計画シタルモ都合ニヨリ見合セタル処今般更ニ大統領ノ電訓ニ基キ来ル七月七日東京発浦潮經由オムスクニ赴ク事トナリタル旨ヲ語り且ツ其ノ使命ハ今回聯合側カ巴里ニ於テオムスク政府ニ対シ援助ヲ供与スルコトニ決定セル關係上親シク同地ニ赴キ「コルチャック」其他ノ当路者ト会见シ實際ニ就キ其ノ援助ノ程度方法等ヲ研究シ更ニ進ンテ同政府承認問題ニ関シ大統領ノ参考トナルヘキ資料ヲ得ムトスルニアル処之等ニ関シテハ在オムスク其他西比利亞日本代表者ト隔意ナキ意見ノ交換ヲ為シ度キニ付キ差

支ナクハ予メ相当電訓シ置カレタシト附言セルニ付本大臣ハ早速夫々電訓スヘキ旨答ヘ置キタリ就テハ同大使貴地ニ赴キタル節ハ右ノ御含ニテ克ク接觸ヲ保タレ出来得ル丈便宜ヲ供与セラルルト共ニ隔意ナク所見ヲ交換セラレ參考トナルヘキモノハ随次電報アリタシ
尚我陸海軍憲ヘモ其筋ヨリ電訓ノ答
佐藤へ
本電ノ趣旨長尾鐵道院理事ノ含ミ迄ニ同官ニ伝ヘ置カレタシ

五三六 七月十二日

内田外務大臣ヨリ
在本邦露國大使宛

オムスク政府へ日本政府小銃彈供給ノ件

政二機密送第四五号

以書翰致啓上候陳者「オムスク」政府へ小銃彈供給方ノ件ニ関シ客月十一日附貴信第四九〇号ヲ以テ御申越ノ趣致敬承候右ハ早速關係官庁へ及移牒置候処右小銃彈壹千万発「オムスク」政府へ供給方取計ハシメタル趣今般同官庁ヨリ返答ニ接シ候条右様御承知相成度此段回答申進旁本大臣ハ玆ニ重ネテ閣下ニ向テ敬意ヲ表シ候 敬具

(参考)

陸軍当局ヨリノ照会

一、現在不用品ナキヲ以テ直ニ之ヲ補充セサル可カラス
從テ其費用ノ支出ニ付大蔵省ト交渉シタル処確實ニ戻
入ヲ為シ得ルニ於テハ一時立替置クモ可ナリトノコト
ナレハ代金支払ヲ得ル途確實ナルヲ要ス

二、毎月二千万発ノ彈藥ヲ製造スルニハ相当職工等ノ増
員ヲ要スヘク從テ不用ニ帰シタリトノ理由ニテ中途解
約セラルルハ迷惑ナリ故ニ約定期限内ハ解約セストノ
保障ヲ得ルコトヲ要ス

五三七

七月十七日 在仏国松井大使ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

オムスク政府承認問題ニ関シ牧野全権ヨリ英

国外相代理ノ意向打診ノ件

講第一六五四号

(七月二十日接受)

十二日牧野ハ倫敦ヲ辞スルニ先立チ珍田大使同伴英国外相
代理「ロード、ガーゾン」ト会见シ意見ヲ交換シタルカ其
ノ要領左ノ通り

一、牧野ハ皇帝ノ御優遇ヲ謝シタル後此ノ機会ニ於テ一二

カ支那ニ對シ寛容ナル態度ヲ以テ之ニ臨マレ度シト言ヒシ
トキ「(beau geste)」ノ一句ヲ用キタルカ此ノ一句ハ宛カ
モ七月九日「タイムズ」ノ社説ニモ表ハレ居リタル語調ニ
シテ「カーゾン」ノ談話ノ文体カ該社説ノ論旨ニ似タル所
アリタルハ注意ヲ惹キタル所ナリ

二、對露問題殊ニ「コルチャック」承認問題ニ付牧野ハ日
本ハ露國ノ秩序回復ニ就テハ常ニ満腔ノ同情ヲ以テ其ノ可
成速カニ成功センコトヲ希望シ玆ニ二年間慎重ニ考究セシ
モ何分其ノ中心勢力確立シ居ラサル為援助ノ目標ヲ見出し
得サリシ事態ナリシカ数ヶ月前ヨリ「コルチャック」政府
ハ其ノ基礎モ稍鞏固ナルニ至リシノミナラス露國各方面ノ
人種及代表的団体モ殆ト一致シテ之ヲ支持シ之ト聯絡シ殆
ト事實上露國統一事業ノ中心勢力タラントスル勢力ナリシ
ヲ以テ玆ニ日本ハ同政府ヲ援助ノ目標トシ列國共同シテ其
ノ露國秩序回復ヲ幫助スルコト事宜ニ適スル方策ナリト認
メ先ツ第一ニ其ノ政府承認ヲ列國ニ提議シタル次第ナルガ
貴見如何ト質ネタルニ「カーゾン」ハ巴里ニ於ケル五国会
議ニ於テハ「コルチャック」承認問題ニ付直チニ明白ニ承
認ヲ与フルニ至ラサリシハ大ナル誤謬ヲ為シタリト信ス当

陳述シ置キ度キコト有リトテ昨今倫敦ノ新聞ニモ支那側ヨ
リ出テタル山東問題ニ関スル記事ヲ掲ケ有ル処自分ノ了解
スル所ニテハ日本政府ハ条約ノ批准済マハ可成速ク条約ノ
規定ニ基キ適當ノ条件ノ下ニ山東ニ於ケル独逸ヨリ得タル
權利ヲ還附スル為支那政府ト談判ヲ開始スヘシト信スル旨
ヲ述ヘタルニ「カーゾン」卿ハ山東問題ニ就テハ特ニ注意
シ居ル如キ態度ニテ今貴説ヲ聞クハ満足スル所ナルカ自分
ノ考ニテハ日本ハ批准後直チニ(Immediately)右交渉ヲ
開キ正当ニシテ且寛大(Just and Generous)ナル条件ヲ
以テ支那側ニ臨マルルニ於テハ支那目下ノ激昂モ鎮定スル
ニ至ルヘシ日本ハ五大國ノ一ニシテ讓歩の態度ヲ採ラルル
トモ其ノ威嚴ヲ毀損スルカ如キコトナシト信ス北京ニ於テ
ハ支那ニハ元ヨリ日本ニモ好意ヲ有スルニ付相当尽力スル
場合アラハ進シテ之ニ当ルヘシト云ヘリ牧野ハ其ノ好意ヲ
謝シ尚誤解ナキ為批准後ハ適當ナル条件ノ下ニ出来得ル丈
ケ早ク(As soon as possible)還附ノ談判ニ着手スヘク思
考シ居ル旨ヲ附言シ置キタリ

「カーゾン」卿ハ以上山東問題ヲ答フル際ハ稍憂慮ヲ懷キ
本件ノ速カニ落着スルヲ熱望シ居ル様子ヲ見受ケタリ日本

時此ノ策ニ出テタランニハ露國ノ事態ハ改善セラレシナラ
ント思ハル然シナカラ今日トナリテハ既ニ時期ヲ失シ殊ニ
「コルチャック」軍ノ失敗退却セル為形勢稍非ナル際更ニ
承認問題ヲ持出スモ却ツテ不面目今暫ク形勢ヲ觀タル上ニ
テ好機ヲ俟ツノ外ナカルヘシト述ヘ尚「チェック」スロヴァ
ク」軍ヲ北露軍ト「コルチャック」軍トノ中間聯絡ニ利用
スルコトニ談及シ同軍ハ到底之ヲ引受ケサルヘク將又之ヲ
引受ルトスルモ本年結氷期迄ニ成效覚束ナシト思ハルト語
リ何レノ途「チェック」軍撤退後ノ西比利亞沿線ノ警備ニ
就テハ主トシテ日本ノ力ニ依ラサル可ラストテ我方ノ意向
ヲ質ネタルヲ以テ本件ニ関シテハ日本政府ニ報告シ置ケリ
ト答ヘ置キタリ

三、次テ波羅の諸州ノ問題ニ付牧野ハ右諸州ノ独立ノ問題
ハ種々議論アルカ自分ノ考ニテハ人口二三百万ノ諸州カ各
独立シテ小國ヲ樹テ而モ独露間ニ介在スル以上早晚何レカ
ノ勢力中ニ捲込まルルハ止ムヲ得サル大勢ナルヘシ從ツテ
聯合側ニ於テハ大露西亜ト結合セシメ外交權迄モ独立セシ
ムルカ如キコトヲ止メ自治州トシテ留存スルコト然ルヘキ
ニ非ヤト述ヘタルニ「カーゾン」ハ同感ナリ該州カ露西亜

ト独逸トノ間ニ介在スル時ハ絶エス之ヲ掌中ニ収メンコトヲ勉メ右各州平和ノ障害ヲ為スヘキニ付矢張り露国ト関係ヲ持続スル方得策ナルヘシト語レリ

右会見ニ依リ同卿カ露国問題等ニ付巴里ニ於テ会谈セル英國ノ政治家トハ其ノ所見ヲ異ニスルコトヲ示シタリ
在欧米各大使ヘ転電セリ

五三八 八月四日 山梨陸軍次官ヨリ
幣原外務次官宛

オムスク政府へ兵器供給ニ関スル件

(別紙)

オムスク政府へ供給兵器品目表

品目	員数
三八式歩兵銃 (携帯予備品ヲ含ム)	五〇、〇〇〇
三十年式銃剣	五〇、〇〇〇
三八式銃実包 挿弾子 紙函共	二〇、〇〇〇、〇〇〇
計	

備考一、単価ハ浦潮渡ノ価格トス

単価	小計
四七七四〇	二、三八七、〇〇〇
七五〇〇	三七五、〇〇〇
九六二〇〇	一、九二四、〇〇〇
計	四、六八六、〇〇〇

陸軍省送達西発第八〇四号 (八月五日接受)

大正八年八月四日

陸軍次官 山梨半造(印)

外務次官 幣原喜重郎殿

オムスク政府へ兵器供給ニ関スル件回答

首題ノ件ニ関シ本月廿一日附政二機密送第一二四号ヲ以テ申越ノ趣テ承露国大使要求ノ小銃五万及実包二千万発ノ譲渡総額別紙ノ通ニ候条可然取計相成度候也

五三九 八月十四日

在ハルビン佐藤総領事ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

オムスク政府外相代理日英米仏四国外交代表者ニ

対シ危急存亡ノ戦況説明ノ上援助懇請ノ件

第七五五号

松島ヨリ第一八六号

八月十日外務大臣代理ハ日英米仏四国外交代表者ノ参集ヲ求メ左ノ通り時局ニ関シ説明シ且ツ懇請セリ「トボル」河線ハ一応之ヲ守ルヘキモ軍隊集中ノ関係上結局「イナム」河ニ抛リテ過激派ヲ喰止ムル事トナルヘク二週間乃至三週間ト信スルモ其レ迄ニ内部ニ動揺ヲ来タシ若ハ反乱ヲ惹起スルニ於テハ一大事ニ付政府ハ右様ノ事ナキ様全力ヲ尽クスヘシ政府ハ緊急ノ措置トシテ在「クラスノヤルスク」第八師団ノ一部在「エニセイ」県「ロザノフ」將軍ノ軍隊「アタマン」(不明)ノ軍并ニ水兵及狙撃兵等約二万ヲ至急前線ニ送ルヘシ尚「セメノフ」軍ノ一聯隊ノ来着西比利亞「コザック」ノ蹶起ニ依リ九月十五日迄ニハ手筈整フヘシ今ヤ危急存亡ノ際ニ付出来得ル限り其吏員ヲ戦時勤務ニ就カシメ成ルヘク各商ヲ集メテ其家屋ヲ軍用ニ供スル事トス

ヘシ政府ハ今尚東方ニ移転スルノ計画ナキモ万一ノ為メ書類ハ何時ニテモ運搬シ得ル様用意シ居レリ

事情右ノ通りニ付露国政府ハ聯合國ニ対スル希望ヲ述フル事左ノ如シ

一、聯合國殊ニ在留地代表者ハ此際努メテ平静ノ態度ヲ持シ悲觀的意見ノ發表ヲ避ケラレ以テ精神の援助ヲ与ヘラル事

二、事情ノ如何ニ不拘軍需品ノ供給ヲ繼續セラル、コト

三、一般計画ノ進捗ヲ從來ノ通り繼續セラル、コト(米國大使東京ニ歸ルトモ在當地米國総領事ヲ經テ同大使ニ通報スルノ途アルベシ)

四、差当リ是非トモ聯合國ノ援助ヲ求ムル事項(イ)通貨問題(佐藤宛往電第一五〇号)(ロ)鐵道守備問題東支鐵道従業員ノ同盟罷工鎮庄ノ為メ政府ハ「ロマノフ」札一千万留ヲ発行シタルガ最近ノ報道ニ依レバ兩督軍間ノ戦鬭ノ結果支那兵鐵道守備ノ任ヲ全フセズ鐵道ハ馬賊ノ襲撃スル所トナリ居ル有様ニ付至急聯合軍ヲシテ東支鐵道ヲ守備セシメラレ度尚目下歸還ノ途中ニアル英國軍約五百人ヲ速ニ哈爾濱ニ送り鐵道ヲ守備セシムルコト、シタシ(本件ニ付テハ高柳

少将ヨリ大庭司令官ニ詳細電報ノ管ナリ本官ハ會議ノ席上ニ於テ鐵道守備ノ問題ハ大谷司令官ニ於テ聯合國軍司令官ト協議シ決スベキモノト思考スト述ベ猶緊急措置トシテ英國軍ガ東支鐵道守備ヲナスコトニ賛意ヲ表シ置キタリ）（ハ）在「アルハンゲルスク」英軍ハ撤退スルコトニ決シ「ユデニッチ」「デニキン」等ニ対スル軍需品ノ供給ヲ躊躇シ居ル模様ニテ「ユデニッチ」軍ハ米國ニ援助ヲ求メタル次第ナルガ此ノ際英米仏共々ニ「ユデニッチ」軍ヲ援助セシムル様致シ度シ（外務大臣代理ハ右ノ結果今ヤ反英思想勃興シツ、アリト附言シタリ）

松平へ転電済

五四〇 八月十五日 在ハルビン佐藤総領事ヨリ
内田外務大臣宛（電報）

オムスク政府ノ管理下ニアル準備金ノ東方移

送ニ付連合國側ヨリ外務大臣代理へ申入ノ件

第七六〇号

松島ヨリ第一九〇号

西部戦況面目カラサルニ鑑ミ八月十二日四國代表者外務大臣代理ヲ往訪シ此際「オムスク」ニアル準備金ヲ東方ニ移

スノ必要ナキヤト述ヘタルニ同代理ハ本件ハ政府ニ於テモ既ニ十分考量シタル問題ナルカ政府ハ差当リ当地ニ置クラ適當ト思考シ居レリ即チ今之ヲ他ニ移ス時ハ政府ノ威信ヲ害スベク殊ニ之ヲ浦潮ニ送りテ外國軍隊ノ保護ノ下ニ置カハ一般社会ヲシテ直チニ準備金全部ハ外國ノ担保トシテ外國ニ引渡サレタルモノト誤解セシムルノ惧アルモ聯合國代表者ノ申出ハ「コルチャク」提督ニ伝ヘ其考量ヲ求ムヘシト答ヘタリ

松平へ転電ス

五四一 八月十五日 浦潮派遣軍参謀長ヨリ
参謀次長宛（電報）

英仏兩國ノ對露政策變更ノ兆並モーリス米國

大使ノオムスク來着及米國ノ對シベリア政策

二関スル件

浦参第一五二六号

高柳報

英國ノ對「レニシ」露國封鎖政策ハ西伯利亞方面ニ於テ未タ顯著ニ其然ルヲ認ムル能ハサルモ西露、北露、南露各方面ニ於テ漸次ニ其意義ヲ低下シ軟弱ナラシム英國ニシテ斯

クナレハ仏國ハ遂ニ之ニ從フノ止ムナキニ至ルヘシト云フ之ハ当地与國使臣及「オムスク」政府モ之ヲ認メアリ此機ニ当リ米國ノ態度ハ最モ觀察ニ値ス之ヲ「ウィルソン」大統領ノ言ニ徴スルニ米國ハ何処迄モ西伯利亞援助ノ本旨ヲ物資補給ニ採リ之カ為鐵道ノ経営ニ執着シ此形勢ニ對シ軍隊ノ駐屯ヲ主張シ未ダ變ラス此処ニ於テカ露國一部ノ者ハ米國ノ真意タル全露鐵道ノ壟斷ニアリト憂慮シアルガ然リ吾人ニ在リテモ何ト無ク米國ノ對西伯利亞政策ニハ遠大ノ抱負アルヤラ感セシメ同時ニ之ヲ恐レ之ヲ嫉ムヨリモ寧ロ欣慕ノ念ヲ生セスンハアラス而テ此背景ノ政策トシテ今次当地ニ來著セル「モーリス」大使ハ「オムスク」ヨリ大ナル期待ヲ以テ迎ヘラレ又其來著ト共ニ開催セラレタル与國使臣會議ニ於テモ既ニ報告セル如ク「モーリス」大使ハ敢テ多クノ言ヲ挾マス

該議會ハ鐵道、兵備、財政、産業、衛生、捕虜等ノ事項ニ関シ主トシテ「オムスク」側ノ欲スル与國ヨリノ援助程度ヲ聴取シテ一先ツ之ヲ結了セリ（本會議ヲ機トシ此後ハ必要ニ応シ臨時ニ此會議ヲ開催スル事ニ定マレリ）此結了ト共ニ「モーリス」大使ハ不日帰還ノ途ニ就カントス依テ小官ハ

同大使ヲ訪ヒ「オムスク」滞在間ノ所感ヲ尋ネシニ概ネ左記要旨ヲ語レリ、余ハ「オムスク」ニ來リ過去ノ決意ヲ翻シタル点ハ兎モ角モ西伯利亞ニ堅実ナル政府ヲ樹ツル必要アル事之ナリ而テ其基礎ハ現「オムスク」政府タラサル可ラス此政府ニ對スル社会革命党ノ反抗ノ如キハ与國ノ之ヲ擁立シタル上ニ於テ漸次ニ融和ヲ求メ可ナルヘク余ノ意見トシテハ「オムスク」政府ノ「イルクーツク」ニ移転スルカ如キ政情ニ於テモ依然之ヲ擁立シ度キ考ナリ西伯利亞援助モ「オムスク」政府ノ基礎確定シタル後ニ計画的決定的ニ之ヲ行フヲ可シトシ其以前ニ於テハ之ヲ刻下ニ緊要ナルモノノミニ留メ度キ考ニテ米國トシテハ差シ当リ約四百万円ニ相等スル物質的援助ヲナス外鐵道ノ改善ト「ルーブル」紙幣価格ノ低落ヲ防クノ手段ヲ講スル様其筋ニ意見ヲ上申シ置キタルカ援助ヲ当分以上ノ程度ニ止ムルモ其レ以上ニ「オムスク」政府ヲ窮地ニ陥ラシムルコトナカルヘシト信ス而シテ今ヤ英、仏、等對露政策ニ若干ノ變異アルハ承知スルモ米國ノ同政策ハ今日モ尚ホ變更シタリト思ハレス西伯利亞政策上ニ於テハ英仏ヲ侶トシ日、米提携シテ其主位ニ立ツベシ云々

五四二 八月二十六日 在オムスク松島書記官ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

聯合國武官會議ニ於ケルオムスク政府ノ準備
金移送及外交団撤退問題等ニ付報告ノ件

第二〇二号

八月二十五日聯合國武官會議ニ於テ各武官トモ戦線ニ関シ
悲觀的觀察ヲナシ万一ノ場合ヲ慮リ「オムスク」準備金ノ
東方移送及外交団武官ハ最後迄蹈ミ止マル等(脱)ノ相当
地点ヘ撤退ノ必要アルヘシトノ意見ニ一致シ之ヲ各自国外
交代表者ニ伝ヘタル処二十六日外務省ニ於テ偶然「エリオ
ット」ト落ち合ヒタル節本官ヨリ先キニ外務大臣代理ニ面
会シタル同氏ハ金ノ輸送ニ関シ聯合國代表者ヨリ「コルチ
ヤック」提督ニ勸告ヲ与ヘ度米仏代表者モ賛成ナルカ貴見
如何ト向ヘルニ付本官モ之ニ同意シタルニ期日ハ追テ打合
スヘシト云ヘリ次テ漁業問題ニテ外務大臣代理ニ面会シタ
ルニ同代理ハ外交団ハ余リニ神経過敏ナラスヤト云ヘルニ
付軍憲代表者ノ意見ニ基クモノナリト弁解シタル上外交団
撤退ニ関シ英仏代表者ハ何等意見ヲ述ヘ居タリヤト問ヒタ
ル処仏国代表者ハ反対ノ意向ヲ洩シタリト答ヘタリ本官ハ

敗戦ノ徴候トシテ解釈セラレ却テ恐慌ヲ惹キ起スベシ

(一)「オムスク」政府ハ金ヲ失ハザル限リ「オムスク」陥落
後モ政權ヲ保持シ得ベク且ツ金ハ露国人民ノ所有ニ属シ
「オムスク」政府ノ私有物ニアラザルヲ以テ過激派ノ手中
ニ陥ルノ危険ヲ踏ムハ露国ノ利益ヲ無視スルモノナリ
(二)準備金ガ過激派ノ手中ニ帰スル場合ニハ過激派ハ之ニ依
リ外国ニ於ケル「プロパガンダ」ノ為有力ナル手段ヲ得ベキ
ヲ以テ「オムスク」政府ハ聯合國ニ対シテモ金ヲ安全ナル
場所ニ移スノ義務アリ而シテ右「プロパガンダ」ハ聯合國
ヲシテ反過激派援助ノ継続ヲ不可能ナラシムルニ至ルベシ
(三)依テ準備金ハ可成速ニ浦潮ニ移送シ露国軍隊ノ保護ノ下
ニ置クヲ可トス聯合軍ノ浦潮ニアル間充分安全ナルベク聯
合軍撤退後ハ露国政府ノ要求次第海外ノ安全地ニ移送シ得
ベシ

ヲ記載シタル書付ヲ提示シタル処「コルチャック」提督ハ
準備金問題ハ自分ノ常ニ念頭ニ置ク処ナルガ戦線トノ距離
充分ナルニ拘ラズ今之ヲ他ニ移スハ却テ恐慌ヲ来スノ虞ア
ルノミナラズ若シ戦闘利アラズトスルモ之ヲ他ニ移スノ時
間ハ充分アリト信ズ又目下ノ処有力ナル軍隊ハ出地及前線

当地撤退ノ必要ニ迫ラル、カ如キコトナキ様思料スルモ万
一ヲ顧慮シ在留ノ日本人数名及数百ノ朝鮮人ニハ成ルヘク
当地ヲ引揚クル様注意ヲ与ヘツ、アル処最近当地ニハ好マ
シキ仕事モナキ為順次引揚居ル模様ナリ

松平ヘ転電セリ

五四三 八月二十七日 在オムスク松島書記官ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

オムスク政府ノ準備金移送ニ関シ連合國代表
者ヨリ「コルチャック」ニ勸告ノ件

第二〇四号

往電第二〇二号ニ関シ

二十七日日英仏米四國代表者「コルチャック」提督ヲ往訪
シ準備金移送ニ関スル聯合國代表者間ノ意見ヲ提示スルハ
毫モ露国ノ内政ニ干渉セムトスル意思ヲ有スルモノニアラ
ザル旨前提シタル後右意見

(一)近ク行ハレムトスル戦闘ニ破ル、曉ニハ「オムスク」撤
退ノ為充分ノ時間ヲ有セザルベク從テ軍隊間ニモ恐慌ヲ来
シ準備金ヲ守護スルモノナキニ至ルノ惧アルニ付今ヨリ之
ヲ移送スルヲ可トス若シ戦闘開始後移送ヲ開始スルトキハ

ニアルヲ以テ準備金ハ政府所在地タル「オムスク」ニ置ク
ヲ以テ却テ安全ナリトス之ヲ東方ノ或地点ニ移サンカ却テ
何人カノ手ニ歸スルノ危険アルヲ以テ自分即チ政府ノ当地
ヲ撤退セザル限リ之ヲ当地ニ保存シ置カントス之ヲ浦潮ニ
移スガ如キハ不必要ニシテ自分ノ不可能トスル所ナリ浦潮
ニハ有力ナル自己ノ軍隊ナキヲ以テ若シ聯合國軍ニシテ撤
退セバ同地ニ移シタル金ノ運命何人モ之ヲ保障スルヲ得ズ
將又之ヲ他ニ移シタル結果何人カノ手ニ落ツル場合ニ於テ
未ダ承認セラレザル「オムスク」政府ハ之ニ対スル權利ヲ
主張スルコト困難ナルベク遂ニハ過激派トノ戦闘ヲ継続ス
ルノ実力ヲ衰失スルニ至ルベシト述べ聯合國代表者ノ憂慮
セラル、点ハ金ノ安全ニ存スルト自分ノ充分了解スル処ナ
ルガ遺憾ナガラ今直ニ之ヲ他ニ移送スルコトニハ同意シ難
シト附言セリ

松平ヘ転電セリ

五四四 八月三十日 在米國出淵代理大使ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

コルチャック政府承認問題ニ関スルモリス駐
日大使電報ノ趣旨及譯報者ノ情報ニ付報告ノ

件

第六四七号

数日来当地諸新聞ニ「モリス」大使ヨリ速ニ「コルチャック」政府承認方電稟セル旨伝ヘラレタルモ國務省当局ハ本官ニ対シ之ヲ否認セルニ付連合通信ノ「フード」ヲ通ジ内探セシメタル処同人カ確實ナル筋ヨリ得タル報道ニ依レハ「モリス」ハ「コルチャック」軍不振ノ情況ヲ具シ此際西比利亜ノ状態改善ノ為何等カ為スコキ手段アリトセハ「コルチャック」ヲ承認スル外ナカル可キモ仮令之ヲ承認スルモ同人ニ於テ果シテ西比利亜ノ事態ヲ確保シ得ヘキヤ見込付カサル旨申越シタル迄ニテ決シテ確信ヲ以テ「コルチャック」承認ヲ慫慂シタル訳合ニアラサル趣ナリ將又当館謀報者カ露国大使館側ヨリ得タル報道トシテ内報スル処ニ依レハ目下「オムスク」政府側ト英米仏トノ間ニ千万磅ノ借款交渉進行中ニテ英国ハ Baring 米国ハ Peabody 之ヲ代表シ「オムスク」政府ノ所有ニ係カル金塊ヲ「ベーリング」ノ關係ヲ有スル極東ノ一銀行ニ保管シ之ヲ引当ニ資金供給ヲ計画シ居リ猶ホ之ト関連シ馬尼刺官憲ニ於テ保管中ノ露国紙幣ハ其内「オムスク」政府ニ引渡スコトニ國務省側ト

話合ヲ付ケタル趣ナリ右ハ或ハ露国大使館側ニ於テ其ノ立場擁護上態ト鼓吹シタル次第ナルヤモ計リ難ク事実ノ真偽ニ就キ差当リ何等見当附カサルモ最近米國陸軍当局カ井上武官ニ対シテ過般米國ヨリ西比利亜ニ供給セル兵器類ノ代金ハ露国政府カ桑港ノ一銀行ニ保管セル金塊ヲ以テ支弁セシムル積ナル旨内話セル次第モアリタルニ付序ヲ以テ何等御参考迄ニ申進ス(三十日)

英仏ヘ電報セリ

五四五 八月(註) 内田外務大臣ヨリ 加藤大使宛

新ニ西比利亜ニ簡派セラルヘキ大使ニ関シ内

訓ノ件

附屬書 西比利亜簡派ノ大使ニ関スル制度案綱要

附記一 八月七日内田外務大臣ヨリ原内閣總理大臣宛上

申書(一)(二)

二 加藤大使ヘ口述事項

新ニ西比利亜ニ簡派セラルヘキ大使ニ関スル制度綱要別紙甲号ノ通立案致候得共尙貴官ニ於テ同地方ノ実況ニ就キ各般ノ事情ヲ稽察ノ上右ニ関スル何分ノ御意見提出ヲ俟チテ更ニ詮議確定スルコトト致度ニ付委曲右ニテ御承知ノ上貴

見御稟申相成度尤モ右決定ニ至ル迄ノ間ハ大体該案ノ趣旨ニ依リ事実上各方面トノ關係連絡ヲ適宜処理セラレ以テ任務ノ遂行ニ便セラルル様致度浦潮派遣軍政務部長及在西比利亜及北滿各地領事官ニ対シテハ右趣旨ニ基キ別紙乙号写ノ通内訓致置候間右ニ御承知相成度此段貴官御心得迄申進候也

註 右内訓ノ日附不明ナルモ八月七日頃ト推定セラル(左掲ノ

附記参照) 尚別紙乙号ハ省略ス

(附屬書)

甲号

浦潮派遣軍政務部撤廢ニ伴ヒ新ニ西比利亜ニ

簡派セラルヘキ大使ニ関スル制度案綱要

一、形式

大正六年六月勅令第六十四号特ニ重要ナル任務処弁ノ為臨時特命全權大公使設置ノ規定ニ基キ臨時特命全權大使ヲ任命シ之ヲ「オムスク」ニ派遣ス

一、駐在地

大使ハ主トシテ「オムスク」ニ駐在スルモ必要ニ応シ西比利亜及北滿洲各地ニ出張スルコト

一、組織

大使ヲ輔佐セムカ為外交官及領事官若干名ヲ直屬セシムルコト

前項外交官及領事官ノ一部ヲ浦潮ニ駐在セシメ其ノ主席者ヲ西比利亜鐵道連合國特別委員會日本代表者トスルコト

一、權限

大使ハ西比利亜ニ於ケル軍事以外ノ一般政務ヲ管掌スルコト

一、外務大臣及領事トノ關係

大使ハ外務大臣ノ指揮監督ヲ受クルコト又大使ト西比利亜駐在ノ各領事官及外務省派遣吏員トノ關係ハ常設大公使ト其ノ駐在國ニ於ケル領事官トノ關係ニ準スルコト尚北滿駐在領事官及外務省派遣吏員トノ關係ハ其ノ西比利亜ニ關係アル事項ノ關スル限り右振合ニ從フコト

一、西比利亜ニ派遣シアル外務省以外各省吏員トノ關係大使ト外務省以外各省ノ吏員(陸海軍ヲ除ク)トノ關係ハ前頭大使ト領事トノ關係ニ準ズルコト

一、軍司令官トノ關係

(イ)大使ト軍司令官トノ權限ハ其ノ分界ヲ明確ニスルコト即

チ大使ノ権限ハ前記ノ通トシ又軍司令官ノ権限ハ全然之ヲ軍事ニ限ルコト

(D)大使ト軍司令官トノ権限ニ付疑義ヲ生シタルトキハ政府ニ於テ之ヲ決定スルコト

(E)大使及軍司令官ハ其ノ指揮監督ノ系統ヲ別ニスルコト即チ大使ハ前記ノ通直接外務大臣ノ指揮監督ニ属シ軍司令官ハ陸軍ノ制規ニ依ルコト

(F)大使ノ所管事項中軍司令官ノ所管事項ニ関係アルモノハ大使ニ於テ軍司令官ト協議スルコト又軍司令官ノ所管事項中大使ノ所管事項ニ関係アルモノハ軍司令官ニ於テ大使ト協議スルコト但シ両者ノ間ニ意見纏マラサルトキハ政府ノ決定ヲ俟ツコト

大使カ浦潮ニ滞在セサル場合ニ於テ前項軍司令官ト協議スルニ付テハ浦潮ニ駐在スル大使直屬外交官及領事官ノ主席者ヲ經由スルコト

(附記一) (1)(C)

八月七日内田外務大臣ヨリ原内閣総理大臣宛上申書

(一)

正四位勲二等加藤恆忠ヲ特命全權大使ニ御親任被為在候様

貝加爾湖以西ノモノニモ及ホス

一、極東露軍ノ建設

出兵以前ヨリ列国ト協調シ極東露軍ノ健全分子ヲ保護シ来レル由来ト此方針カ依然帝国ノ対露政策ト合致スルニ鑑ミ従来概ネ左ノ目途ヲ以テ極東露軍ヲ建設支持シ来レリ

尚西伯利亚ノ現状ト帝国ノ派兵ヲ減少スル為メ現在ノ一万六千人ヲ逐次増加シテ約三万人ニ達セシメントス

(イ)沿海州正規部隊 「ニコリスク」附近ヲ中心ト

シ約五千人ニ達セシム

(ロ)「カルムイコフ」 「ハバロフスク」附近ヲ中心ト

トシ約五千人ニ達セシム

(ハ)「クヅネツオ」 「ブラゴヴェシチエンスク」

附近ヲ中心トシ約二千人ニ達

セシム

(ニ)「セミヨーノフ」 「チタ附近ヲ中心トシ約一万

同右 五千人ニ達セシム

一、極東露軍支援ノ要否

極東露軍ノ編成及練成ハ目下ノ所頗ル難事業ニ属シ且

仕度此段及内申候也

(二)

特命全權大使 加藤 恆忠

西比利亞へ出張被仰付

右ノ通仰出候様致度此段閣議ヲ請フ

註 右(一)及(二)ノ冒頭余白ニ左ノ記入アリ

「上申大正八年八月七日

発表大正八年八月十二日」

(附記二)

加藤大使へ口述事項

一、

帝国派兵ノ目的

極東露領ノ安寧秩序ヲ維持ス

露國ノ復興ヲ援助ス

過激思想ノ帝国浸潤ヲ防遏ス

極東露領ニ於ケル帝国ノ勢力扶植

帝国ノ対露政策遂行上必要ナル程度ト帝国ノ負担ヲ可成

軽減スル為メ貝加爾湖以西ニハ派兵セス

一、露國援助ノ方針

帝国ノ援助ハ主トシテ極東露軍ニ対シ行ヒ余力アレハ

其価値大ナラサルモ帝国ハ之カ支援ハ仮令列国ノ妨害ヲ受クルコトアリトスルモ絶対緊要トス若シ帝国ニシテ之ヲ放棄センカ英米ノ如キ代テ之ヲ收容援助シ其傀儡トナルヤ英米従来ノ行動ニ徴シテ明白ナリ帝国ハ深ク此ニ留意スル所ナカルヘカラス

一、帝国保護ノ露國重要人物ト「コルチャック」トノ關係帝国カ特ニ保護セルモノハ「ホルワット」及「セミヨノフ」トス

「コルチャック」ハ此等ノ努力ニ依リ「オムスク」政府ヲ樹立スルヲ得其独裁官トナルヤ旧来ノ公私ノ怨恨ヲ以テ久シク「セミヨーノフ」ト確執反目辛フシテ妥協ヲ見タルモ尚衷心和協セス英米モ亦常ニ之ヲ後援シテ「セミヨーノフ」排除ニ油斷ナシ

「ホルワット」ハ「コルチャック」ノ就任スルヤ直ニ之ヲ承認服従ノ意ヲ表セシニ拘ハラス過日極東代官ヲ免セリ

此ノ如ク「コルチャック」ハ帝国ノ擁護シ来レル極東總健分子ヲ排除シ且帝国ノ素地ヲ覆滅セントス之其背後ニ帝国ノ極東施設ヲ喜ハサル英米等ノ術策ヲ弄スル

カ為ナリ

一、帝国ヨリ露国ヘノ供給

(1)極東露軍ニ対スルモノ

小銃 一万九千挺
小銃彈藥 二千万発
機関銃 百十八挺
火炮 三百十四門
此等兵器代金及被服其他ノ軍需品
代金計五百二十万円

(2)「オムスク」政府ヘ直接供給セシモノ

小銃彈藥 二百万発
「オムスク」政府ヘ直接ノ供給ハ極メテ少額ニシテ
他列国ノ補給(別表)ノ比ニアラス之カ我援助方針
ノ然ラシムル所ニシテ将来オムスク政府援助補給ノ
途確定セハ尚増加スルコトナルヘシ
右列記ノ外帝国カ露国ニ対シ援助シタル軍隊支持
費、食料品、廉売、救済費等ハ頗ル多額ニシテ尚革
命前ニ露国ニ供給シタル兵器軍需品代ハ実ニ二億一
千万円ノ巨額ニ達ス

(別表)

列国援助主要物件

一、英国

小銃 十五万挺 已着 外二十万挺追送ノ筈
野砲 五十門
被服一切 二十万人分
外ニ英国ハ「ルスキー」嶋ニ士官学校ヲ設ケ將校養
成ヲナス

二、仏国

火炮 四百門
飛行器 三十台
其他電話器等

三、米国

米国ハ從來「オムスク」政府ニ兵器彈藥ノ援助ヲ与ヘ
サリシモ最近ニ至リ本国政府ノ在華盛頓露国大使トノ
間ニ物品購買ノ交渉行ハレアリ現ニ七月末ノ「オムス
ク」列国會議ニ於テ米国ノ引受ケシ物品左ノ如シ
軍裝品 六十万人分
小銃 四十万挺 内五万挺ハ契約済
他ハ引受ケ得ル見込

彈藥 五億万発 米国商人引受申出

機関銃 三千挺

同彈藥 七万五千発 引受予定

等

一、鐵道守備ニ関スル日米ノ見解

本年四月十四日浦潮臨時代表武官會議ニテ「イルクーツ
ク」以東鐵道守備ニ関シ日、米、支三国ノ分担区域ヲ決
定セリ

守備区域ハ軍隊ノ駐屯竝ニ鐵道管理区域トハ關係ヲ有セ
ス専ラ外敵ニ対シ鐵道ノ運行ヲ保護ス

帝国軍ハ過激派及不逞ノ徒カ妨害ヲ加フルニ際シテ兵力
ヲ用ヒシモ内政又ハ露国軍憲ノ紛争ニ原因スル事件ニハ
兵力干渉ヲ行ハスシテ露国高級官憲ノ処置ニ任ス方針ナ
リ

米国「モーリス」ノ見解ハ之ト異ナル其真意ハ「セミヨ
ーノフ」圧迫ニ在リ将来尚問題ヲ起スヘシト推察セラル
米国ハ過激派モ一党派ト見做シ之カ討伐ヲ行ハサリシモ
近來稍々其態度ヲ改メ「ウスリー」地方ノ討伐ニハ参加
セリ然レトモ其価値ハ認メラレス

一、派遣軍ノ情况

將卒一同心身健全ニシテ極寒暑ニ堪ヘ克ク勤勞シアリ殊
ニ過激思想ニ対シテハ実地ノ教育ヲ受ケ忠君報國ノ精神
益々堅確トナレルコト想像以上ナリ

言論不通、風俗習慣ヲ異ニスル為メ又英米等ノ排日的普
伝ノ為当初ハ帝国ノ領土の野心ナトニ付誤解ヲ受ケシモ
今ヤ露国官民ノ氷解スル所トナリ特ニ黒龍州ノ如キハ帝
国軍ニ対スル信頼ハ実ニ著シキモノナリ

一、特務機關

軍司令官ノ隷下ニ特務機關ヲ置キ諜報、軍事涉外事項竝
露軍ノ援助指導ニ任セシム其配置及主任者左ノ如シ

「オムスク」機關

高柳少将

「イルクーツク」

加納大尉

「チタ」

黒沢大佐

「ハルピン」

石坂少将

浦潮

井染中佐

「ハバロフスク」

五味大佐

「ブラゴヴェシチエンスク」

中山大尉

昨年十月「オムスク」特務機關ヲ設ケ露国官憲トノ交渉

ニ任セシメ且其情勢ヲ偵知セシメタリ其後派遣セラレタル我外務官憲ト協力シツツ現ニ勤務中ナリ

一、經濟的發展ニ就テ

近時極東露領ニ於テ兵器製造所其他ノ工場ヲ復興利用シ日露合資ニ依リ經營セントスル希望アリ其他派兵間ニ着着經濟的發展ヲ企画スルヲ緊要トス

「オムスク」政府請求軍需品

一、大正七年十月以前ニ請求ノ分

小銃	二十万挺
同実包	五億万発
機関銃	五千挺
同実包	五億万発
野砲	四百門
同榴弾	六十万発
同榴散弾	六十万発
重砲	百五十門
同榴弾	十五万発
同榴散弾	十五万発
飛行器	六十台

電話器	八百個
被覆線	五千吉
電信器	七百個
電信線	六千吉
輕自動車	四百台
貨物自動車	千二百台
装甲自動車	五十台
自動車	五百台
外套	二十万着
長靴	二十万足
騎兵乘馬具	三万脊
藥品	二十万人分
右見積代価一億八千二百七十八万七千七百円ニシテ交付済ハ小銃彈二百万発ノミ	
二、七月十四日浦潮電報ニ依リ請求ニ接セシモノ (此注文ハ其前二、三回ニ亘リ小額ノ請求アリシヲ未済ノ儘ナリシヲ以テ更ニ総括シテ申込来リシモノナリ)	
日本小銃	五万挺(内二万挺騎銃)
同彈藥	毎月二千万発

機関銃 十挺

山砲 八門

同属品、繫駕具、彈藥匣共、

同彈藥 二万五千発

右ノ内小銃五万挺及小銃彈二千万発ノ補充ニ関シテハ陸軍省ト露国大使館ト交渉中ニシテ陸軍省ヨリ製作費支払ノ確保ヲ条件トシテ供給スル旨ヲ通知シ目下露国大使館ニテ「オムスク」政府ニ対シ該証明下附方電報中ナリ又毎月二千万発ヲ爾後継続シテ供給ノ件ハ露国側ニテ何ケ月間永続シテ受ケ度キ希望ナルヤ不明ナルヲ以テ問合中ナリ

三、七月十六日附ヲ以テ露国陸軍省ヨリ請求セシモノ

軍服 九万人分 「セミヨ一ノフ」軍団並ニ鉄道隊用トシテ
右ノ内「セミヨ一ノフ」ハ「オムスク」政府ノ承認ヲ經テ直接日本ニ左ノ品目ノ補給ヲ請求セリ

外套 三万

上衣 一万五千

袴 三万

帽子 一万五千

長靴 二万足

右總數ノ価格ハ到底我至急交附ヲ許ササルノ状態ナルヲ以テ最近中央部ニ於テハ露国陸軍次官中將「スーリン」ト交渉ノ結果先ツ

外套 一万八千着

衣袴 一万八千着

ヲ「セミヨ一ノフ」用トシテ本月末浦潮ニ於テ交附スルコトニ予定セリ

五四六 九月二日 在ハルビン佐藤總領事ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

モリス米国大使オムスクヨリノ帰路佐藤總

領事力面談意見ヲ徴セシ件

第八三五号 (九月四日接受)

若杉ヨリ第八七号

米国大使「モリス」「オムスク」ヨリ帰任ノ途次当地ニ立寄りタルニ付本月二十八日訪問其所見ヲ叩クニ要領左ノ通

一、「ウラル」戦線ノ「コルチャック」軍ハ言語道斷ノ有様ニシテ更ニ戦意ナク寧ロ軍隊無シト云フモ可ナリ從テ

「オムスク」政府ハ目下頗ル危殆ニ瀕シ何時其地位ヲ失墜スルヤモ計リ難シ同政府承認ノ如キモ時機既ニ遅レタリ少クトモ今ヨリ数週間前ニ「モーラル、サツポート」ヲ与ヘタランニハ或ハ活路ヲ見出シ得タランモ今トナリテハ望ミナシ只形勢ヲ傍觀スルノ外ナカルベシト甚シク悲觀シ尚ホ「コルチャック」カ過激派ノ真相ヲ誤解シ専ラ武力解決ニノミ力ヲ用ヒ社会革命ノ根本原因タル経済生活ノ方面ニ対スル方策ヲ怠リタルハ非常ナル誤ナリト非難シ居レリ

二、「モーリス」大使ノ過激派ニ対スル觀察ヲ窺フ為メ本官ハ対露政策ノ中心問題ハ結局過激派ヲ如何ニ見ルカニアリト思考スルカ閣下ハ過激派ヲ米国南北戦争ノ際ニ於ケル南北兩軍ノ如ク露国内ノ一当局ト見ラルルヤ将又人類共同ノ敵タル terrorism ノ団体ト見ラルルヤトノ質問ニ対シ大使曰ク世間ノ所謂過激派ナルモノハ(1)現ニ欧露ニ於テ「テロリズム」ヲ行ヒツツアル寧ろ少数ノ「レーニン」一派ノ熱心ナル共產主義者即チ真ノ過激派ト(2)時局乃至生活ニ不満ヲ抱ク多数民衆(彼等ハ寧ろ露国革命本来ノ精神及其効果ヲ望ムモノ)トヲ混同スルノ嫌ヒアリ現ニ西比利亞各地ニ於ケル所謂過激派ノ如キハ「コルチャック」政府又ハ地

ツノ外ナカルベシト断言セリ

四、鉄道守備ニ関シ「モーリス」大使ハ往電第七六号同様ノ説ヲ為セルヲ以テ本官ハ日米取極中少クトモ鉄道線ノ警察権ガ那邊ニ存スルカノ点ニ付キテハ明記ナキヲ以テ議論ノ余地有ルベキヲ指摘シ現ニ我軍隊側ニ在リテハ露国軍當然ノ行動トシテ其警察権ノ行使ヲモ認メ得ル模様ナルヲ以テ此点ニ関シテハ日米ノミナラズ露国トモ協議ノ上更ニ明確ナル理解ヲ遂グルノ必要ナキヤト反問セル処大使ハ本件ニ関シテハ日米取極當時既ニ日米兩軍ニ守備ノ責ニ任ズルコトト成リ居ルヲ以テ当然露国軍ノ干渉ヲ許サザルモノト了解セラレ居ル筈ニ付キ今更露国ト交渉ノ要無カルベシト云ヘルヲ以テ本官ハ鉄道管理委員中ニモ露国委員ヲ加ヘル以上前提トシテ同国ノ参与ヲ認メ居ルモノトスレバ露国軍隊ノ存立ヲモ無視スルヲ得ザルベク從ツテ鉄(脱)ノ警察権ノ行使ニ付テモ露国軍ノ干与ヲ排除シ専ラ日米軍ノミ之ニ当ラザルベカラズトナスニハ特別ノ規約無キ以上其了解ニ差異ヲ生ズルモ已ムヲ得ザル次第ナラズヤト述べタル処大使ハ鉄道管理ニ関スル取極ノ際自分ハ十分コノ点ヲ考慮シ露国政府ハ存在セザルモノトシテ露国委員モ亦露国政府

方的巨魁例ヘハ「カルムイコフ」「セメノフ」等ノ高压的政治ニ反抗スル不平分子ニ外ナラス前者ハ実ニ恐ルベク惡ムベキ団体ナルモ後者ニ就キテハ寧ろ右ノ差別ヲ明カニシ單ニ漠然タル過激派ノ名ニ誤ラレテ直ニ早速討伐スルガ如キハ大ニ慎マザル可ラズ斯ノ如キ多数分子ヲ敵トスルニ於テハ到底際限ナカル可ク又莫大ノ費用ヲ要ス可クシテ所謂過激派討伐援助ニ反対ラシキ意向ヲ洩セリ

三、本官ハ所謂過激派ノト(脱)質問セル所大使ハ真ニ然リ故ニ時局収容ノ途ハ唯一アルノミ即チ彼等多数不平分子ニ生活ノ安定ヲ得セシムル為經濟的援助(例ヘバ食料品ノ製造器械農具等ヲ供給シ之ガ支払方法トシテ「クレジット」ヲ開設スルガ如シ)ヲ与フルヲ第一急務トス而シテ彼等ヲシテ相当ノ政治組織ヲ整ヘシメ漸次彼等自身ヲシテ真ノ過激派ノ処分ヲ為サシムルノ外ナシ此見地ヨリ經濟的通路ヲ確保スルタメ少クトモ「イルクーツク」以東ノ西比利亞鐵道ノ保護及ビ運行ヲ監督スルコト緊要ナリ斯ノ如クシテ差当リ「イルクーツク」以東ノ西比利亞ノ社会組織ヲ健全ナラシメ漸次之ヲ西ニ及ボシ全露復興ノ機ヲ待

ノ委員ニ非ズシテ單ニ露国人側ヨリ委員ヲ選ブコトトシタルニ過ギズ此等ノ点ハ屢々説明シ居タルモ日本ノ將校側ニハ遂ニ了解セラレザリシガ如シト言ヘリ

五、依ツテ本官ハコノ点ハ日米兩軍ノ態度ヲシテ同一ニ出デシムルタメ十分相互ノ理解ヲ一致セシムルコト肝要ナラズヤト念ヲ押シタル処大使ハ此ノ点ハ枝葉ノ問題ニ過ギズ更ニ重要ナル点ハ日本ノ政策其ノモノニアリ自分ハ常ニ日本ノ友人ナルガ故ニ敢テ非難ヲ加ハフルモノニハ非ザルモ單ニ事実ヲ事実トシテ復藏ナク言ヘバ「セメノフ」ノ背後ニハ日本ノ援助アリ之日本ハ東部西比利亞ニ於ケル自己ノ政策ヲ行フ方便トシテ「セメノフ」ヲ援助シ居ルニ外ナラズ即チ「セメノフ」ハ其ノ手段ニ過ギズ現ニ黒電方面ノ鐵道ハ全然日本軍ノ手ニテ守備シ居ルニ不拘後員加爾ニ於テハ「セメノフ」ノ行動ヲ放任シ居ルガ如キハ是參謀本部從來ノ政策ノ情勢ニ外ナラズ由來日本ニハ對外政策ヲ支配スル二個ノ政府アリ一ツハ外務省側ト他ハ參謀本部ナリ日本從來ノ對支政策ガ全ク失敗ニ歸シタルハ後者ノ政策ニ誤マラレタル明証ニシテ此ノ点ハ西比利亞問題ニ就キテモ亦日本当局者ノ大ニ鑑ムベキ所ナリ云々

松島、松平、菊池、佐藤へ転電シ古沢へ郵報セリ

五四七 九月十四日 在オムスク松島書記官ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

オムスクへ加藤大使ノ赴任ハ是非トモ実現セ
ラレタキ旨意見具申ノ件

第二一五号

(九月十六日接受)

松平発閣下宛第四五七号(本電末段兼ネテ民党側以下欠如)
ニ依レバ松平部長ハ一方「コルチャク」ノ信用失墜セリト
判断シ他方目下浦潮方面ニ於ケル左党側ノ運動ハ民意ヲ基
礎トスルモノニシテ重要視スルノ必要アリトナシ尚各国首
席外交官モ「オムスク」ヲ去リツツアル今日加藤大使ノ赴
任ハ考ヘモノナリトノ意見ヲ有セラルルガ如クナル処最近
ノ戦況ニ依レバ西比利亞軍幾分持チ直シタルモノノ如ク若
シ不幸ニシテ「イシム」線ヲ支持スル能ハズ「オムスク」
政府ガ当地ヲ撤退スルノ已ムヲ得ザルニ至ル可シトスルモ
同政府ハ直ニ覆滅ス可キモノトモ思考セラレズ極東ニ於ケ
ル左党分子ガ頻リニ「コルチャク」政府ノ压制政治裁断政
策ヲ攻撃スルモ其ノ压制ト云ヒ武断ト云フハ何ヲ指スモノ
ナルヤ(脱)ヘリ右彼等左党ガ所謂民意ナルモノハ何処ニ

之ヲ求ム可キヤ民心ハ既ニ戦乱ニ飽キ為政者ノ左党タルト
甚ダシキハ過激派タルト問ハズ唯秩序ノ一日モ速ニ恢復
セラレンコトヲ望ミツツアルモ為政者ノ見地ヨリスレバ過
激派ノ存在スル間秩序ノ恢復ハ到底望ミ難キヲ以テ已ムヲ
得ズ戦闘ヲ継続スルノミ戦闘ヲ継続スル間多少ノ強制ハ免
カル可ラズ此ノ際民意ヲ標榜シテ政府ヲ樹立スルトモ対過
激派戦争ヲ其ノ綱領ノ一トスル以上民心ハ政府ヲ謳歌スル
コトナク却テ新ナル政府ノ醸成ヲ忌ムノ結果ヲ来ス可シ
彼等左党ハ自己ヲ以テ直ニ民意ヲ代表スル者ナリトスル錯
誤ニ陥リ又自治機関ノ活動ノ如キ秩序恢復ノ後初メテ之ヲ
期待スベキ自治機関ノ活動ニ依リ秩序ノ恢復ヲ求ムルガ如
キハ頗ル困難ナルコトヲ覚知セザルモノナリ西比利亞ノ現
状ニ於テ自治制ニ経験ナキ民衆ヲシテ自治ヲ行ハシメント
スルハ西比利亞各地ニ於テ牛耳ヲ執ル者ハ猶太人タルベキ
危険ヲ顧慮セザル患者ナルカ若ハ猶太人ノ手先トナリテ活
動スル代理者ナリ
極東ニ於ケル政治的陰謀大ニ進捗シ居ルトスルモ「オムス
ク」政府ノ覆滅旦夕ニ迫リ居ラズトセバ加藤大使ノ赴任ハ
之ヲ実現セシメ度シト思考ス「エリオット」ヤ「マルテル」

加藤大使一行浦潮向出発ノ件

第三八六号

加藤大使伊藤副領事及和田書記生随伴二十一日敦賀発鳳山
丸ニテ貴地ニ向ヘリ
矢野領事モ同行セリ
右菊池総領事へ転電アリタシ

五四九 十月二日 在浦潮松平政務部長ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

加藤大使一行オムスク向出発ノ件

第四九六号

(十月三日接受)

加藤大使十月二日オムスクニ向ケ当地出発セリ哈爾濱「チ
タ」「イルクーツク」へ各一泊ノ上十四日オムスク着ノ予
定

五五〇 十月二十一日 在本邦露国大使館ヨリ
日本外務省宛

オムスク政府財政援助方懇請ニ関スル件

AMBASSADE DE RUSSIE.

AIDE MEMOIRE

Au cours de l'année dernière, les Gouvernements

五四八 九月二十二日 内田外務大臣ヨリ

在浦潮松平政務部長宛(電報)

松平へ転電済
タル
利亞ニ於ケル帝国ノ地歩ヲ確保スル為メ最好機会ト思考セ
タル

Alliés ont trouvé possible d'accorder une assistance sérieuse aux forces armées du Gouvernement Russe d'Omsk aussi bien qu'à l'armée de volontaires du Général Denikine et à d'autres organisations militaires russes dans leur lutte contre les Bolshevïks, en leur fournissant des armes, des équipements et d'autres matériaux nécessaires.—

Cependant, malgré ce soutien et malgré l'énergie des efforts des armées nationales russes, la lutte avec l'ennemi bien armé et solidement établi dans le vrai centre de la Russie, ayant en outre l'avantage de disposer des voies de communication intérieures et d'utiliser ce qui reste de l'industrie russe, ne peut être autre que tenace et prolongée. Cette lutte pèse de plus en plus lourdement sur la Sibérie qui, malgré ses dimensions étendues et ses riches ressources naturelles n'est que peu peuplée et faiblement développée économiquement. Une année d'une lutte pareille a épuisé la population sibérienne et a affaibli les ressources déjà

limitées du Gouvernement. Une double charge incombait au Gouvernement : le maintien d'une armée nombreuse et le soutien de la vie économique et industrielle presque détruite. Il est naturel que dans des conditions pareilles les revenus du fisc se sont trouvés loin de couvrir des besoins énormes et toujours croissants. De son côté l'émission des billets de banque et les lois invariables de l'économie sociale ont amené une baisse toujours croissante de la valeur de la monnaie fiduciaire et un renchérissement des objets de consommation.

Il n'y a malheureusement pas de doute que le Gouvernement sans aide du dehors n'est pas en état de mettre un terme à la baisse de la valeur des billets en circulation tandis que la nécessité de subvenir aux besoins économiques de la population exclue la possibilité d'un travail tranquille et efficace et menace même de créer une atmosphère de mécontentement aigu et d'une fermentation constante des esprits qui ne saurait inspirer que les plus graves appréhensions.—

Le Gouvernement Russe considère que l'on est arrivé à une limite où l'application seule des mesures les plus radicales pour l'assainissement de la circulation monétaire pourrait sauver le pays de la catastrophe financière et économique approuvante qui surgira dans toute son étendue au moment de l'unification de la Russie. Le

Gouvernement est obligé de prendre certaines mesures préparatoires pour ce temps-là. Comme première mesure il se propose de remplacer les bons sibériens à courte échéance, étant faciles à limiter et n'inspirant pas suffisamment de confiance, par de nouveaux billets de crédit fabriqués en Amérique. Ne considérant cependant pas cette mesure comme suffisante le Gouvernement a décidé de donner un fondement solide à cette nouvelle monnaie fiduciaire en créant dans ce but un fonds de réserve inaliénable en or. Indépendamment de l'or russe se trouvant actuellement à Paris et à Londres et dont l'emploi sera décidé ultérieurement, le Gouvernement se propose de réserver dans ce but l'or qui se trouve

actuellement à Omsk et dont la valeur dépasse 200 millions de dollars.

La réalisation de ce plan trouve malheureusement des obstacles presque insurmontables dans la situation internationale dans laquelle le Gouvernement est obligé d'agir à l'heure actuelle. N'ayant jusqu'à présent pas obtenu d'emprunt d'aucune des Puissances étrangères le Gouvernement a été en même temps forcé de s'engager dans la voie d'achats indépendants à l'étranger de matériel de guerre et de produits industriels. Les fournitures qui étaient livrées autrefois au Gouvernement Russe par l'Angleterre et la France à crédit ne sont plus mises à sa disposition, notamment par l'Amérique, que sous condition de paiements à terme ; un dépôt de garantie en or est également exigé, impliquant le risque de sa perte si une consolidation de la dette accumulée par suite de ces achats n'a pas lieu à temps. De même les banques étrangères ne fournissent jusqu'à présent des fonds au Gouvernement que sous condition d'une

garantie en or. Le Gouvernement est cependant forcé de conclure ces transactions en vue de la nécessité urgente d'obtenir des matériaux non seulement pour l'armée, mais aussi pour satisfaire les besoins les plus primifs de la population en fait de pétrole, sucre, chaussures etc. Dans des conditions pareilles déjà au mois de Juin passé la nécessité s'est présentée d'affecter près de 13,000 pouds d'or pour parer aux paiements les plus urgents. Il a fallu vendre plus de 3.000 pouds de ce total et déposer pour les emprunts à Londres, New-York et Tokio 7.500 pouds. —

Ces ressources furent utilisées pour l'acquisition de fusils, d'objets de munitions et d'équipement, de sucre et aussi pour le paiement de quelques achats des Généraux Denikine et Yudenitch. Les paiements prochains seront faits pour de nouveaux achats de fusils et d'équipements du Gouvernement Américain, de matériaux militaires aux fabriques Remington, Colt et autres. A ceci doit être ajoutée une série de dépenses pour

aide réelle dans cette affaire est d'un caractère de forme et non de fond, le Gouvernement Russe s'en réfère à la déclaration amicale faite par les Puissances le 5 Juin dernier qui lui permet d'espérer que des décisions radicales seront prises par elles dans cette question.

Les besoins effectifs du Gouvernement Russe dont le total monte à 300 millions de dollars ont été établis au mois de Juillet dernier pendant la visite à Omsk de Mr. Morris, Ambassadeur des Etats-Unis à Tokyo et ont été en son temps communiqués aux Gouvernements Alliés. — Tokyo, le 21 Octobre 1919.

(欄外註記)

十月二十一日クルペンスキー来談手交(内田外務大臣印)

(右和訳文) (註 仮訳文ナリ)

覚書

客歲聯合國政府ハ「オムスク」政府ノ軍隊「デニキン」將軍ノ義勇軍及其ノ他ノ露国軍隊ニ対シテ武器被服其ノ他ノ必要品ヲ供給シ以テ其ノ過激派トノ對抗戦ニ有力ナル援助ヲ与フルコト可能ナリト認メラレタリ

然ルニ該援助及露国国民軍ノ奮闘ニ拘ハラス敵ハ武装良好

l'entretien à l'étranger de représentants diplomatiques et autres ainsi que les frais pour télégrammes.

L'application prolongée de cette méthode aurait pour suite inévitable la liquidation progressive des fonds d'or de l'Etat et si des changements radicaux ne sont pas introduits dans le système actuel le moment n'est pas éloigné où tout l'or sera dépensé. Cela rendrait non seulement entièrement impossible la réforme projetée de la circulation monétaire mais aurait pour longtemps des conséquences irréparables pour l'avenir financier de l'Etat russe. —

La préservation de ce fonds de réserve en or forme par conséquent la tâche immédiate du Gouvernement et il en sera responsable devant la future assemblée constituante russe. Le Gouvernement Russe croit de son devoir d'informer les Puissances de sa sérieuse situation financière et économique estimant que l'obligation d'y trouver une issue ne souffre point de délai. Reconnaissant que l'empêchement pour les Puissances d'accorder une

ニシテ露国ノ中央ニ鞏固ナル地位ヲ占メ内部ノ交通線ヲ有利ニ使用シ露国ニ残存セル工業ヲ利用スルニ依リ戦争ハ尚執拗ニ永續セラルヘシ

此ノ戦争ハ面積广大ニシテ天然ノ資力ニ富ムモ人口稀薄ニシテ経済状態不完全ナル西比利亞ヲシテ益困難ニ陥ラシムルニ至レリ一箇年ノ戦争ハ西比利亞ノ人民ヲ疲勞セシメ既に制限アル政府ノ資力ヲ減殺セリ政府ハ多数ナル軍隊ヲ維持スル外殆ト破壊セラレタル経済界工業界ヲ援助スルノ義務アル為国庫ノ收入ハ絶エス増進スル巨多ノ需要ニ応スル能ハス一方紙幣ノ発行ト社会経済ノ原則トハ紙幣ノ価格ヲ益暴落セシメ且物価ヲ騰貴セシムルニ至レリ

外部ヨリノ援助無キニ於テハ政府ハ流通紙幣ノ下落ヲ停止スルコト能ハス又安シテ充分ナル仕事ヲナシ能ハサル境遇ニアル人民ノ経済状態ノ救護ニ応シ能ハス為ニ非常ナル民心ノ不満ヲ惹起シ悪感情ヲ激発セシムルノ虞アルハ不幸ニシテ疑フノ余地ナシ

露国政府ハ露国統一ノ暁全国ヲ通シテ生スヘキ財政上及経済上ノ災禍ヲ防クニハ貨幣流通ヲ整理スル為ニ最大根本的ノ方法ヲ執ルヨリ外ニ策ナキ程度ニ達シタリト思考シ之カ

為或ル準備の措置ヲ執ラサルヲ得ス其ノ第一段トシテ模造シ易ク且充分ノ信用アラサル短期西比利亞債券ニ代ルニ米國製造ノ新紙幣ヲ以テセントス政府ハ尚此ノ手段ヲ充分ト認メスシテ此ノ紙幣ニ鞏固ナル信用ヲ附セムカ為金ノ不動準備資金ヲ設備スルニ決定セリ政府ハ追テ用途ヲ決定スヘキ巴里及倫敦現存露國金塊ノ外ニ目下「オムスク」ニアリテ價格二億弗以上ナル金塊ヲ準備金ト為ス考ナリ然レトモ右計畫ノ実行ハ露國政府カ目下ノ國際地位ニアリテ行動セサルヲ得サルカ為不幸ニシテ殆ト排除シ能ハサル障害ニ遭遇セリ露國政府ハ今日迄何レノ外國ヨリモ公債ヲ募集シ能ハサル為別ノ方法ニ依リ外國ニ於テ軍需品及工業品ヲ買入ルルノ止ムヲ得サルニ至レリ從來英國、仏國ヨリ「クレジット」ニテ露國政府ニ売渡シタル物品モ今日ニテハ其ノ供給ヲ為サレス殊ニ米國ハ支払期ヲ定ムルヲ條件トスルニ至レリ加之往々金塊ノ担保ヲ要求セラルコトサヘアリ而モ該担保ハ若シ物品買入ノ為ニ生シタル債務ノ整理ヲ行ハサレハ之ヲ失フノ危機ヲ伴フモノナリ尚外國銀行ハ金塊担保ノ條件ニアラサレハ政府ニ資金ヲ提供セス然レトモ政府ハ軍隊ノ為ノミナラス石油、砂糖、靴等ノ如キ日用

品ニ付人民ノ需要ヲ満足セシメムカ為前記ノ如キ処置ヲ為ササルヲ得ス本年六月ニ於テ既ニ如斯狀態ナリシニ依リ最緊急ノ支払ノ為ニ金塊一万二千「ブード」ヲ使用シタリ其ノ内三千「ブード」余ハ之ヲ売却シ倫敦、紐育及東京ニ於ケル借款ノ為ニ七千五百「ブード」ヲ提供スルノ必要アリタリ
右資金ハ小銃、彈藥、被服、砂糖等ノ買入及「デニキン」「ユデニッチ」兩將軍ノ購買品代價支払ニ利用セラレタリ又今後ハ米國政府ヨリ小銃及被服ノ新規買入及「レミントン」「コルト」其ノ他ノ製造所ヨリ軍需品買入ノ為ニ支払ヲ要スヘシ又之ニ外國ニ於ケル外交代表者ノ駐在費、電報料其ノ他ノ諸雜費ヲ加算スルヲ要ス
右ノ如キ方法ノ実行繼續セハ必然露國ノ金資金ハ漸々消費シ尽サルノ結果ヲ生シ若シ現狀ニ根本的變更ヲ加ヘサレハ金ノ全部ヲ失フノ時期遠カラスシテ來ルヘシ之カ為ニ貨幣流通改善ノ計畫ハ全然不可能トナルノミナラス露國財政上ノ將來ノ為ニ永期ニ涉リテ回復シ能ハサル影響ヲ生スヘシ

金準備資金ノ保存ハ露國政府ノ急務ニシテ將來ノ憲法議會

ニ對スル義務ナリ露國ノ困難ナル財政及經濟狀態ヲ列國ニ報道スルハ政府ノ義務ニシテ之ヲ救済スルハ其ノ最急務ナリトス露國政府ニ於テハ列國カ本件ニ關シテ現實ノ援助ヲ与フルコトヲ妨クルモノハ根本問題ニアラスシテ形式問題ナリト認ムルニ依リ本年六月五日列國ノナサレタル友誼的聲明ニ信賴シテ列國ハ本問題ニ關シ根本的決定ヲ与ヘラレシコトヲ敢テ希望ス

露國政府ノ實際ノ必要額カ三億弗ニ達セルコトハ東京駐劄米國大使「モリス」氏カ「オムスク」訪問ノ際本年七月中心決定シ直チニ之ヲ聯合國政府ニ通告セラレタリ
千九百十九年十月二十一日 東京ニ於テ

(別紙)

讓渡軍需品一覽表

種類	數	量	讓渡價格	支払方法
被服	軍服 軍靴	九〇、〇〇〇組 五〇、〇〇〇足	一一、二九四、五〇〇円	全額ノ二割 大正八年十一月 四割 大正九年一月 四割 同 三月
通信器材	電話機 電線 其他	三、五〇〇 一五、〇〇〇露里	一、八八五、八〇〇円	百万円ハ物件ノ半数引渡ノ日ヨリ十日ノ後、殘額ハ他ノ半数ノ引渡ヲ了シタル日ヨリ十日ノ後浦潮ニテ支払フ

五五一 十月二十五日

日本外務省ヨリ
在本邦露國大使館宛

オムスク政府ニ軍需品供給ノ件

覚書

帝國外務省ハ先般來屢次在本邦露國大使館ヨリ申越アリタル「オムスク」政府ニ於テ入手方希望ノ軍需品ノ件ニ關シ今般帝國政府ニ於テ同大使館申出ノ支払方法ニ基キ別紙寫ノ通供給スルコトニ決定シタル旨並供給方法等ノ細目ニ關シテハ更ニ後報スヘキ旨茲ニ同大使館ニ回答スルノ光榮ヲ有ス

大正八年十月廿五日

東京ニ於テ

兵 器	小銃及銃	
	實 劍	包 二〇、〇〇〇、〇〇〇
外ニ毎月	一〇、〇〇〇、〇〇〇	〇〇〇〇
	一年分	一二〇、〇〇〇、〇〇〇

一六、一四五、一〇〇円	現品受領ト共ニ東京ニ於テ円ヲ以テ 支払フ
-------------	-------------------------

五五二 十一月四日 在オムスク加藤大使ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

日本軍イルクーツク以西派遣ニ対シ報償提供
ノ用意アル旨オムスク政府申出ニ関シ請訓ノ
件

第二六二号 (十一月五日接受)

往電第二五七号末段ニ関シ「ジャン」將軍ハ本使ノ注意
ニモ拘ハラス露国側ニ向ヒ報償問題ヲ持出シタルモノト見
エ其ノ後本使ヲ来訪シ「イルクーツク」以西鉄道守備ノ為日
本ヨリ出兵セラルルニ於テハ露国政府ハ(一)樺太、Dag 鉾附
近ノ炭礦ヲ日露合併及石炭ノ一部ヲ露国ニ供給スルコトヲ
条件トシテ日本資本家ニ経営セシムルコト(二)日本政府希望
ノ通り漁業協約ヲ改訂スルコト礦山及森林開発ノ為日露合
弁会社組織ニ関シ協議ヲ開始スヘシト申出タリ尚十一月一
日大藏大臣ハ本使ヲ来訪シ左ノ通り内話シ且書面ヲ送附セ

リ北滿及極東露領ニ於ケル日露間經濟的協力ニ関スル自分
ノ計画即チ客年六月来横浜正金銀行ヲ經テ日本政府ニ交渉
セル東支鐵道ノ各支線ノ敷設及北滿及極東露領ニ於ケル鉾
山森林ノ開発ニ関スル件ハ露国政府ノ全然承認スル所ナリ
賓黒鐵道ニ関スル合併契約ハ既ニ成立シタルモ極東ニ於ケ
ル現状ハ其ノ実行ノ延期ヲ余儀ナクセシムルニ至レルニ付
此際該計画ノ一部即チ北滿及極東露領ノ鉾山森林開発ノ件
ヲ協議致シ度シ依テ露国政府ハ喜ビテ北樺太ニ於ル炭坑ノ
日露合併及漁業協約ノ改訂ヲ承諾スベシ茲ニ露国政府ノ最
モ希望スル処ハ目下危険ヲ感ジツツアル地方即チ「クラス
ノヤルスク」ヲ中心トスル地方ニ於ケル西北比利亜鐵道守備
ノ為日本政府ガ直チニ出兵セラレン事及「オムスク」撤退
ノ場合ニ政府ノ根拠地タルベキ「イルクーツク」市ニ駐兵
セラレン事はナリ尚右出兵ニ対スル費用ハ露国政府之ヲ負

担スベシ云々

十一月三日外務大臣代理ニ面会シ前記大藏大臣ノ書面ハ政
府ヲ代表セルモノナリヤヲ糾シタルニ同代理ハ政府ガ本件
ノ交渉ヲ大藏大臣ニ委任シタルハ彼ガ極東ニ於ケル經濟問
題ニ通曉シ居ルニ鑑ミ便宜ナリト思考シタルガ為ナリト明
言シ更ニ政府ノ名ニ於テ同書ヲ確認スル書面ヲ送り越セリ
右出兵ニ関シ両大臣ハ極力本使ノ助力ヲ求メタルニ付彼ガ
熱心ナル希望ハ委細我政府ニ電報シテ其回訓ヲ請フベキモ
斯ル遠隔ノ地ニ於ケル出兵ハ極メテ困難故政府ノ承諾ハ期
待シ難シト申置タリ
本件ニ関スル帝國政府ノ御意向可成速ニ御回電相成度尤モ
本使等撤退ノ場合電信遲着ノ虞アルベキニ付本使ニ対シ御
發電ト同時ニ在日本露国大使ヲシテ露国外務省ヘ電報セシ
ムル様御取計相成度シ
松平ヘ転電セリ

五五三 十一月四日 在浦潮軍參謀長ヨリ
參謀次長宛(電報)

オムスク政府ノ撤退輸送開始狀況ニ関スル件

浦參第一九六三号 (十一月八日接受)

一六 「オムスク」政府承認問題一件 五五三 五五四

「オムスク」政府諸官省ハ「イルクーツク」ニ撤退スルニ
決シ遂次輸送ヲ開始ス「オムスク」ニハ最高執政官及他ニ
大臣會議ト総司令部以下所要ノ軍部ノミ殘留スルコトナ
ルヘシ交通次官ハ先發シ三、四日頃ニハ「イルクーツク」
着ノ予定「セメノフ」ハ「オムスク」ヨリ輸送中ナル金塊
二千八百四十封ヲ二十九日「チタ」帝國銀行ニ預ケタリ其
理由ハ該金塊哈爾濱ニ於テ反政府党ニ悪用セラレントスル
情報ニ接シタル為ナリ

五五四 十一月五日 在浦潮松平政務部長ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

オムスク政府ノイルクーツクヘ移転決定ニ関
スル件

第五二二号 在「イルクーツク」ニ瓶發本官宛第三七号左ノ通大臣ヘ転
電アリ度シ
第一一二号

十月三十一日「イルクーツク」県知事ノ本官ニ語ル所ニ依
レバ「オムスク」政府ハ戦況ノ不利ナルニ鑑ミ行政ノ中心
ヲ当地ニ移スコトニ決定シ主ナル官吏四千八百名近日中ニ

一六 「オムスク」政府承認問題一件 五五五 五五六

来ル筈ニテ目下家屋ノ準備ニ奔走中ナリ云々
右ハ「オムスク」ヨリ詳細電報済ミト思考セラルルモ為念
申進ス尚ホ「オムスク」政府一部ノ当地移転ハ幾分地方割
拠ノ弊ヲ除キ得ル利アリト説ク者アルモ是ガ為メ政府ノ威
信ヲ害シ却ツテ割拠ノ弊ヲ増進スルヤモ計リ難ク生活難ニ
基ク人心ノ腐敗極度ニ達セル折柄トテ仮令日本軍隊一部ノ
招致ニ成功シ是ヲ以テ地方ノ秩序ヲ維持シ併セテ幾分士氣
ヲ振興スルコトアリト假定スルモ是ト同時ニ生活難ヲ救済
スルノ方策ニシテ確立セザル以上對過激派戦ノ發展覚束ナ
シト思考セラル

五五五

十一月六日 内田外務大臣ヨリ
在オムスク加藤大使宛(電報)

コルチャック政府ノオムスク撤退情況ニ付電

報方訓令ノ件

第一二四号

最近「ウラル」正面軍ノ戦況不良ニ伴ヒ「コルチャック」
政府ハ「オムスク」ヲ撤退シ「イルクーツク」ニ移転スヘ
キ旨頻リニ都下新聞ニ見ユル処貴地情況殊ニ政府移転ノ企
画同政府準備金ノ保管実況等ニ付至急回電アリタシ

「オムスク」撤退後ニ於テ安全ト汽車運転ノ責任ヲ確実ニ
期待シ得ストナスニアリ

五五七

十一月六日 在ハルビン佐々木総領事代理ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

オムスクノ陥落近キ形勢ニ鑑ミ之ガ対処ノ措

置ニ付報告ノ件

第一〇二九号

加藤大使ヨリ第二六三号

過激軍ノ一部ハ既ニ「イシム」河ヲ渡リ西比利亞軍ハ「オ
ムスク」ヲ距ル約八十里ノ地点ニ防戦シツツアリ此ノ線一
度敗レ更ニ退却スルモ「オムスク」ガ敵手ニ歸スル迄ニハ
尚ホ多少ノ時日アルベシ政府ハ内閣員及小教官吏ヲ除ク外
各官庁ヲ「イルクーツク」ニ移スコトニ決シ其ノ輸送ヲ開
始シ其ノ準備金塊等モ同地ニ移シ始メタリ市民壯丁ノ移転
ヲ禁止シ軍人ノ家族ヲ始メ多数婦人ノ撤退ヲ命ジ十月二十
日ヨリ十一月三日ノ間ニ東行ノ列車ハ百ニ達セリ仏国「ジ
ヤナン」英国ノ(不明)ハ其ノ幕僚ヲ率ヒテ十一月六日立
退キニ決シ英国外交代表者米國領事モ同時ニ引揚ノ由ナル
モ仏国外交代表者ハ本使ト行動ヲ共ニスベシト申シ居レリ

一六 「オムスク」政府承認問題一件 五五七 五五八

五八八

五五六 十一月六日

在浦潮派遣軍參謀長ヨリ
參謀次長宛(電報)

オムスクヨリ加藤大使及特務機關撤退ニ関ス ル件

浦參第一、九七五号

(十一月八日接受)

加藤大使及ヒ「オムスク」特務機關ノ撤退延期ニ関シ福田
大佐ヨリ左ノ電報アリ

四日「オムスク」發、今日更ニ聯合國武官會議ヲ開キ
「オムスク」撤退ニ関スル交渉ヲ遂ケシニ英、仏、米代表
者ハ悉ク明六日「オムスク」ヲ撤退スルコトニ一致セルカ
當機關ハ我加藤大使ト交渉ノ上目下大臣會議ノ猶「オムス
ク」ニアリ諸官署ノ撤退スラ未タ漸ク開始セラレタルニ過
キサル今日情況危険ナリトノ理由ヲ以テ「オムスク」ヲ撤
退スルハ過早ナリトナシ猶「オムスク」在留シ情況ノ激変
セサル限り露國大臣會議ノ主腦部ノ撤退期ヲ決定スル時若
シクハ政府ヨリ撤退ヲ勧告スル時ニ於テ出發スルコトトセ
リ(三字不明)聯合國代表者ノ撤退理由ハ現在露國諸機關
動揺ノ今日之ト意義アル交渉ヲ保ツニ適セス又鉄道従業員
ハ既ニ罷工ノ徴アルヲ以テ来ル六日「チェック」軍隊ノ

我領事館ハ雇員一名ヲ留守番ニ残シ館員ヲ本使ノ列車ニ集
合ス在留日本人ハ先發セリ朝鮮人ノ一部ハ去ル九月戦線不
利ノ際領事ノ説諭ニ依リ東方ニ去リ當時撤退ヲ肯ゼザリシ
者約三百名ニ対シテハ領事館ニ於テ汽車切符購入等ノ便宜
ヲ与ヘツツアルモ最後迄面倒ヲ見ルコトハ不可能ナリ尚本
使一行ハ露国外務当局ノ此ノ地ニアル間ハ居残りノ積リ

五五八

十一月七日 在ハルビン佐々木総領事代理ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

加藤大使一行イルクーツクヘノ撤退決定ニ関

スル件

第一〇三九号

(十一月八日接受)

加藤大使ヨリ第二六六号

戦線ノ事態頗ル險惡ニシテ政府ガ決戦ヲ試ミントシタル
(不明)ハ準備未タ整ハサルニ敵ノ襲來急速ナルヲ以テ到
底之ヲ支フル能ハサルヘシトノ情報アリ他方「チェック」
軍近日当地撤退ノ上ハ「オムスク」以東ヘノ輸送ハ何人モ
之ヲ保証スル能ハサルノ狀況ニアリ「オムスク」撤退委員
長モ間接ニ本使一行ガ速ニ撤退センコトヲ勧告シツツアリ
事態右ノ如シトスルモ政府殊ニ外務当局ノ撤退スルカ又ハ

五八八

東方ニ其ノ代表者ヲ設ケサル限本使ハ当地ヲ去ル能ハス英
仏外交代表者モ亦同一ノ窮地ニアリシヲ以テ十一月六日英
仏代表者ト共ニ外務大臣代理ニ面会シ相談ヲ遂ケタル処同
代理モ将来ニ於ケル撤退ノ安全ハ保障シ難シ然ル処外務次
官来ル九日当地ヲ発シテ「イルクーツク」ニ赴クヘキニ付
同地ニ御撤退ノ上同官ヲ經テ交渉事務ヲ処理セシムルコト
トナリシニ付英仏代表者モ不日出発ニ決シ本使一行モ陸軍
特務機関ト共ニ不遠「イルクーツク」ニ向ケ出發スルコト
トスヘシ(七日)

松平へ転電済

五五九 十一月八日 在ハルビン石坂少将ヨリ
参謀次長宛(電報)

オムスク政權ノ将来ヲ中心ニ時局観測ノ件

哈市特第二一四号 (十一月九日接受)

時局ニ対スル「ゴンドッチ」急報スルトコロ左ノ如シ
一、今ヤ「オムスク」ハ撤退ヲ開始シツツアリ、縦へ列車
ノ準備整ヒアリトシテモ燃料欠乏ノ為一日僅ニ数列車
ヲ運行シ得ルニ過キサルヲ以テ到底完全ナル撤退ハ困
難ナリト

二、目下戦線ノ退却ニ伴ヒ軍部ノ中堅タル「カザツク」軍
隊ハ有為ノ將校漸次減少シ兵卒ハ戦闘ニ倦ミ自己生存
ノ生活ニ憧憬シ愛国的觀念ナク又其他ノ軍隊モ同様殉
国の行動ニ出ツルモノナキヲ以テ最早戦運ノ挽回ハ困
難ナリト

三、加之高等施政者還送後ノ軋轢猜疑等交々ニ至リ「コル
チャツク」政府モ瓦解ヲ免レサルベシ(是レ從來ノ彼
ノ持論ナリ)而シテ「コルチャツク」ハ縦令「オムス
ク」ニ止マルモ亦「イルクーツク」ニ移ルモ彼ノ運命
ハ絶望ト言フベシ

四、西伯利亚ニ於テハ「エニセイ」県並ニ「イルクーツク」
ニ於テハ反「コルチャツク」ノR、Sノ蹶起ヲ予期セ
サルベカラス彼等ハ交通、通信ノ妨害其他ノ手段ヲ以
テ政府ヲ遮断シ一度、極東ニ於テ旗ヲ翻ヘシ勃興ヲ試
ムルナラン其極東勢力ノ中心ハ矢張り「ガイダ」將軍
ナラン
「チェック」ハ政治上ノ運動ニ加担セス又「ガイダ」
ハ政治上ノ連繫ヲ保タスト言フモ表面ノミニシテ其実
然ラス西方ニアル「チェック」兵ノ多クハ皆独裁政治

ヘシ

東京、浦潮、関東、北京「オムスク」済

五六〇 十一月十五日 在本邦露国大使ヨリ
内田外務大臣宛

オムスク政府イルクーツクへ移転決定ノ件

Ambassade
de Russie
Tokio, le 15 Novembre 1919.
No. 1168.

Monsieur le Ministre.

J'ai l'honneur de faire au Gouvernement Imperial
du Japon la communication suivante au nom de l'Amiral
Kolchak, Chef du Gouvernement Provisoire de Russie:
‘Les conditions exceptionnellement défavorables pour
l’approvisionnement des troupes sur le front sibérien et
l’avantage numérique écrasant des Bolsheviki ont réduit
l’armée sibérienne à une retraite générale et la ville
d’Omsk, résidence du Gouvernement Russe, a dû être
temporairement abandonnée.—

De même que le Gouvernement Français en 1914

ヲ厭忌シテ社会共和政治ヲ謳歌スルモノノ集合ナルヲ
以テ「ガイド」ノ標榜スル政權ハ彼等ノ歡迎スル処ニ
シテ又指揮官部下ノ關係ヲ有ス
五、欧露過激派ハ到底予期ノ如ク發展ヲ遂クルヲ得サル結
果西伯利亚ニ溢出シ是ニ根拠ヲ有シ「トルキスタン」
ニ出テ其命脈ヲ有シ而シテ思想変シ易キ中央亜細亜印
度支那方面ニ宣伝ヲ務メ自己将来ノ發展ヲ計画セント
スルモノノ如シ

六、以上ニ依リ判断スルトキハ残念ニモ露國ハ最早復興ノ
望ミ渺ナク其影響ハ極東露領及北滿洲ニ波及シ而シテ
日本ノ天職タル極東平和ノ保障モ確実ニ保全スルコト
困難ナリ之カ為日本ハ断然極東ノ兵力ヲ増加シ極東ノ
治安ヲ保持スルト共ニ過激分子ノ浸入ヲ防遏シ自國及
東亞ノ平和ヲ維持スルコト必要ナリト考フ

又日本ハ「バイカル」以西ニ派兵スルコトナシトシテ
モ一部ノ兵力ヲ「イルクーツク」ニ派遣シ之ヲ前進拠
点トシテ保有シ置クコト必要ナリ「イルクーツク」ヲ
日本ノ勢力下ニ置クコトノ必要ナルハ予ノ数々述フル
処ニシテ今ニシテ之ヲ行ハサレハ再ヒ時期ハ到ラサル

a dû quitter provisoirement Paris par suite de considérations militaires, le Gouvernement Russe se transporte pour quelque temps à Irkoutsk.

Le Gouvernement accomplit ce sacrifice pour conserver l'armée destinée à une lutte future avec les Bolshéviks.

L'esprit moral vigoureux que les troupes ont montré au cours des combats défavorables durant ces quelques mois donne au Gouvernement l'espoir que l'armée sibérienne après un certain repos et certaines mesures pour compléter les effectifs et parer aux défauts de l'approvisionnement retrouvera de nouveau l'élan nécessaire pour l'attaque. Le réveil de la conscience nationale dans le peuple russe au cours de la lutte avec les Bolshéviks-internationalistes, usurpateurs flagrants du pouvoir, ainsi que la haine croissante dans les masses du peuple contre ses oppresseurs, permettent au Gouvernement d'envisager tranquillement l'avenir avec une foi complète dans la victoire finale.—

plus ou moins toutes les nations du monde : le bolshévisme en Sibérie est un danger sérieux pour tous les pays d'Asie.—

Le Gouvernement Russe qui a toujours maintenu une fidélité inaltérable à ses Alliés au cours de la guerre contre les Puissances Centrales d'Europe, s'adresse aux Gouvernements des Puissances amies, du Japon, de l'Angleterre, de la France, des Etats-Unis d'Amérique, de la Pologne, de Tchécoslovaquie et de la Chine, se sentant assuré que ces Gouvernements continueront à lui prêter leur assistance. Dans ces conditions le Gouvernement Russe qui se trouve à la tête de toutes les forces russes en lutte avec le bolshévisme aura la certitude de pouvoir mener cette lutte jusqu'à la victoire finale.”—

Veuillez agréer, Monsieur le Ministre, les assurances de ma très haute considération.—

Son Excellence

Monsieur le Vicomte Uchida

La preuve la plus éclatante de la haine populaire contre les Bolshéviks est fournie par la fuite en masse de la population devant le flot avançant des Bolshéviks ; les ouvriers des grandes usines (Volkinsky, Ishevsky ; Zlatoustovsky et Satkinsky) se sont échappés des lignes bolshévistes ; les paysans des régions du Volga et de l'Oural et d'une partie de la Sibérie Occidentale ainsi que les cosaques d'Orenbourg et de la Sibérie ont quitté leurs villages en emmenant femmes et enfants pour éviter les violences des bandes bolshévistes. Tout accord avec les Bolshéviks qui ont su provoquer des haines si profondes dans la population est impossible, et ce qui reste c'est la lutte à l'outrance jusqu'à la complète extermination du pouvoir des Soviets.—

La Russie attire l'attention des Puissances amies sur le fait qu'en accomplissant des sacrifices sans nombre dans la lutte avec les Bolshéviks elle poursuit non seulement un but national mais lutte en même temps contre le danger mondial du bolshévisme qui menace

Ministre des Affaires Etrangères

Signé : Kroupensky

(右和訳文) (註 仮訳文ナリ)

以書翰致啓上候陳者本使ハ全露仮政府ノ首長タル「コルチャツク」提督ニ代リテ日本帝國政府ニ対シ左ノ如キ通告ヲ為スノ光榮ヲ有シ候

西比利亜正面ニ於ケル軍隊ノ給養甚シク不良ニシテ過激派軍ノ兵力著シク優勢ナリシカ為西比利亜軍ハ遂ニ総退却ノ止ムナキニ陥リ全露政府ハ其ノ所在地タル「オムスク」市ヲ暫時撤退セサルヘカラサルニ至リ候

一千九百十四年仏國政府カ軍事上ノ見地ヨリ一時巴里ヲ撤退セサルヘカラサリシカ如ク全露政府モ亦或期間「イルクーツク」ニ移駐致候

全露政府ハ將來過激派ト戦フヘキ軍隊ヲ保持セムカ為此ノ犠牲ヲ払フモノニ有之候

西比利亜軍カ過去數月ニ渉ル不況ナル戦闘ニ際シテ表明シタル強烈ナル道義的精神ニ徴シ全露政府ハ西比利亜軍ニシテ暫時ノ休養ヲ得更ニ兵員ノ補充ト糧食ノ補給トヲ得ルニ於テハ攻撃ニ必要ナル新精力ヲ回復スルニ至ルヘシトノ希

望ヲ抱懷スルニ至リ申候近時漸ク權力ヲ獲得スルニ至リシ
算奪者タル国際過激派ニ対スル戦争ニ際シ露国民中ニ現ハ
レタル国民精神ノ覺醒ト衆民中ニ増大シ米ル圧制者ニ対ス
ル憎惡ノ念ニ鑒ミ全露政府ハ靜ニ其前途ヲ望見シテ最後ノ
勝利ヲ期待致居候

過激派ニ対スル一般の憎惡ノ念ハ過激派ノ前進ニ伴ヒ各地
住民カ大挙シテ逃避スルノ事実ニ依リ一層顯著ナル例証ヲ
見申候即チ「ウトキンスキー」「イシエフスキー」「ズラト
ウストフスキー」及「サトキンスキー」等ノ大工場ノ労働
者ハ過激派ノ戦線ヲ脱出シ「ヴォルガ」地方及「ウラル」
地方乃至西部西比利亞ノ或地方ノ農民並ニ「オレンブルグ」
ノ「哥薩克」及「西比利亞」ノ「哥薩克」ハ過激派団ノ狂
暴ヲ避ケムカ為ニ妻子ヲ伴ヒテ其ノ居村ヲ去リ申候
如斯過激派カ人民ノ深甚ナル憎惡ヲ受クルコトヲ暴露セル
今日之ト妥協スルコトハ一切不可能ニ有之從テ今ヤ唯々
「ソヴィエツト」ノ權力ノ絶滅スル迄之ト決戦ヲ試ムルノ
方途ヲ剩スノミニ有之候

露国ハ無数ノ犠牲ヲ払ヒツツ尚自国ノ為ノミナラス実ニ全
世界ノ邦国ヲ挙ケテ多少トモ其ノ脅威ヲ被リツツアル過激

第一二五号

「オムスク」ヲ出(脱)避難民ハ其数既ニ数万ニ達シ「オ
ムスク」当地間(二千四百有余露里)ハ列車輻輳シテ混雜
ヲ極メ本月一日「オムスク」ヲ出発シタルモノガ今尚当地
ニ到着セザル有様ナリ

「オムスク」政府ハ当地來着後全然当地ノ露軍及「チエツ
ク」軍ノ実力ノ下ニ立ツコトナル可キヲ以テ彼等ノ態度
如何ハ「オムスク」政府ノ運命ニ重大ナル關係有スル次第
ナリ然ルニ拙電第一一六号ヲ以テ申進シタル通り当地ニ於
ケル各勢力ハ互ニ睨合ノ姿ニアリ「チエツク」軍中ニハ民
党ニ好意ヲ有スル分子モ尠カラザルヲ以テ「オムスク」政
府ノ來着手間取ルニ於テハ中心勢力ヲ欠キ民心動搖シ紛糾
セル事態ヲ現出スルニ至ルヤモ計リ難シ

五六二 十一月十九日

在ハルビン佐々木總領事代理ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

オムスク陥落及加藤大使ノウ・ニコラエフ

スクニ到着ノ旨報告ノ件

第一九六八号

(十一月二十日接受)

二瓶ヨリ第一三二五号

一六 「オムスク」政府承認問題一件 五六二 五六三

主義ノ世界的危険ニ対シテ戦争ヲ繼續シ米リタル事実ニ関
シ友邦諸国ノ注意ヲ喚起致候西比利亞ニ於ケル過激主義ハ
一切ノ亜細亞諸国ニ対シ重大ナル危険ニ有之候

中欧諸国ニ対スル戦争中常ニ同盟諸国ニ対シ渙ラサル至誠
ヲ披瀝シ來レル全露政府ハ日、英、仏、米、波蘭「チエツ
クスロヴァツク」及支那等ノ友邦諸国政府カ全露政府ニ対
シ尚繼續シテ援助ヲ与フヘキコトヲ確信スルモノニ有之候
過激主義ト戦ヒツツアル一切ノ露国諸權力ノ首班タル全露
政府ハ斯ル境地ニアリテ克ク此ノ戦争ヲシテ終局ノ勝利ニ
導クノ力アルコトノ保障ヲ得ルニ至ルヘク候

右申進旁々本使ハ玆ニ重ネテ閣下ニ向テ敬意ヲ表シ候敬具

五六一 十一月十五日

在浦潮松平政務部長ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

オムスク政府ノ避難先タルイルクーツクノ情

勢ニ付報告ノ件

第五三四号

在「イルクーツク」二瓶領事發本官宛電報第四六号左ノ通

リ

大臣ヘ転電アリタシ

十一月十七日当地ニ於テ發表セラレタル最高司令官ノ公報
ニ拠レハ同月十四日晚ヨリ十五日朝ニ亘リ「オムスク」市
ハ北方ヨリ次第ニ過激派軍ニ包圍セラレテ遂ニ其ノ手ニ歸シ
「オムスク」軍ハ「イルテシ」河ヲ渡リ橋梁ヲ破壊シ「オ
ムスク」市ノ東方二十五露里ノ地点ニ退却セリ
加藤大使ハ十七日無事「ノウ・ニコラエフスク」ニ到着セ
リ

五六三 十一月二十日

在英國珍田大使ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

露国内反過激派援助ニ関スル英國政府ノ方針

ニ付珍田大使カーゾン卿会谈ノ件

第五一四号

貴電第四六四号ノ件ニ関シ

十一月十九日「カーゾン」卿ト会見ノ際英國政府モ同様ノ
申出ニ接シタルト察セラルルカ是ニ対シ如何ナル措置ヲ取
ルヘキ意向ナルヤヲ質問シタルモ同卿ニ於テハ更ニ本件ヲ
記憶セラレサル趣ニ付露国大使覺書ノ要領ヲ述ヘタルニ同
卿ハ英國政府ヘモ多分同様ノ申出アリタルナラン取調ノ上
考量スヘシト答ヘラレタリ更ニ本使ハ首相最近ノ演說ニ言

及シ英國政府ハ愈々露国反過激派ニ対スル援助ヲ停止スヘキヤト問ヒタル処同卿ハ首相ノ声明ハ前ニ閣議ニテ慎重審議ノ結果決定シタルモノニテ元來露内反過激派ニ対スル援助ハ主トシテ軍需品ノ供給ナルカ是カ支出ニ当リ仏国ハ勿論米国モ兎角尻込勝ニテ要領ヲ得サル結果勢ヒ英國ノ单独負担ニ帰シ居タル処露国財政ノ窮状ニ顧ミ際限ナク援助ヲ継続スルノ不可能ナルヲ認メ打切ノ方針ヲ取ルニ決シタル次第ナリ「コルチャック」ニ対シテハ数月以前ヨリ既ニ實際援助ヲ与ヘタルコトナク「デニキン」ニ対シテハ地理上ノ便モアリ援助シ居リ向後モ亦来年三月迄ニ一千五百万磅ノ範圍ニ於テ相当援助ヲ支給スヘキモ其ノ以後ハ全然打切トナスコトニ決定シタル由來ヲ語ラレタルニ付本使ハ然ラハ「オムスク」政府今後ノ申出ニ対シ考量ノ余地ナキカ如シト述ヘタルニ対シ同卿ハ英國一国ノ問題トシテハ勿論余地ナキモ聯合諸国協同シテ何等方法ヲ講スルハ自ラ別事ニ属スヘク本件ハ篤ト考量スル所アルヘキ旨約セラレタリ

米仏伊ヘ転電セリ

五六四 十一月二十一日 在米國幣原大使ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

テ同政府ハ動モスレバ反動的政策ヲ遂行シツツアルガ如ク觀察スル向モ渺カラズ要スルニ此ノ間同政府ニ財政的援助ヲ与フルコトハ詮議困難ナリト思考スル旨ヲ答ヘタリ本使ハ更ニ長官ニ向テ巴里最高會議ガ嘗テ「コルチャック」ヲ援助スルノ保障ヲ与ヘタルコトアリ今回ノ申出ニモ之ヲ援用シテ援助ヲ求メタル次第ナリト述ベタルニ長官ハ巴里最高會議ノ覚書ニ言ヘル援助トハ自分ノ了解スル所ニテハ寧ロCivilian Nature ノモノヲ指シ即チ食料被服等ノ供給ヲ意味スルモノナリト答ヘタリ次デ本使ハ往電第八一〇号ニ關シ米國政府ノ對露方針ヲ探リタルニ長官ハ米國ノ對露政策ハ何等變更スル所ナク過激派反過激派ノ間調停ノ計画ニ参加スルガ如キ意思ナシト確言セリ終リニ本使ヨリ最近對露政策ニ関スル英國首相演說ニ言及シ本件ニ就テハ英米兩國政府間ニ何等意見ノ交換アリタルヤト尋ネタルニ長官ハ全然無之旨ヲ答ヘタリ

英仏伊ヘ転電セリ

五六五 十一月二十二日 在浦潮松平政務部長ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

「コルチャック政権崩壊阻止ノ方策」ニ関シ具申ノ

一六 「オムスク」政府承認問題一件 五六五

「コルチャック政府ヘ財政援助其他二付國務長官ト会见ノ件

第八二二二号

貴電第七四六号ニ関シ

二十日本使國務長官ヲ往訪ノ際本件「コルチャック」政府提議ノ要領ヲ概説シ右ハ米國政府ニ対シテモ同様ノ申出アリタルコトト推測スル旨ヲ述ベタル処同長官ハ何等スル提議ヲ受ケタルコトナシ但シ「コルチャック」政府筋ノモノヨリ米國銀行家ニ対シ金塊ヲ担保トシ五千万弗ノ借款ヲ求メタルコトアルモ右ハ米國政府トハ何等關係ナク且其後ノ成リ行ヲ承知セズト答ヘタリ依テ本使ヨリ「コルチャック」政府今回ノ申出ハ此ノ種個人的借款トハ趣ヲ異ニシ同政府ニ於テ今後此ノ種借款ニ依頼スルトキハ遂ニ金準備ヲ枯渴紙幣価格ノ暴落ト物価ノ暴騰ヲ見ルニ至ル可キヲ憂慮シ内政ヲ強固ナル基礎ニ置カンガ為メ聯合國側ヨリ有力ナル財政援助ヲ得ントスルニアルモノノ如シト述ベタルニ長官ハ本來「コルチャック」政府ハ木ダ承認セラレタルモノニ非ズ又其ノ基礎モ動搖シツツアリ殊ニ「コルチャック」自身ハ正直ナル人ナル可キモ其周囲ノ人物ニハ面白カラザルモノアリ從

件

第五七一号

在「イルクーツク」二瓶發閣下宛電報第一四二二号左ノ通転電ス

「オムスク」既ニ過激派ノ手ニ帰シ「チェック」軍ハ歸心矢ノ如ク民黨ノ反政府熱ハ極度ニ達シ遂ニ今回ノ浦潮事件トナリ日本ハ「バイカル」以西ノ出兵ヲ拒絶シ「コルチャック」ハ今ヤ全ク孤立セリ政治ノ前途ヲ悲觀シ最高執政官ノ権能ヲ「デニキン」ニ譲リテ隱退ス可シト伝ヘラル此ノ噂ニシテ果シテ事実トセバ帝國政府ハ援助ノ目的物ヲ失ヒ從來ノ行掛ト言フノ外殆ド何等ノ意味ナクシテ政府ノ前途暗澹タル西比利亞ニ永ク兵ヲ止メ馬賊ニ等シキ過激派ノ討伐ニ無益ノ犠牲ヲ払ヒ「デニキン」ヲ援助スル英仏單リ露國復興ノ名譽ヲ博スルニ至ル可キヲ虞ル

帝國政府ハ此ノ際「コルチャック」ノ隱退ヲ引キ止メ貝加爾以西ニ出兵シテ露國及列國ノ希望ヲ満足セシムルヲ得策トスヘク若シ此ノ上多數ノ出兵ヲ困難トスル事態アラハ「セメノフ」ヲ黑竜省ニ移シ「カルミコフ」ト協力シテ黑竜鳥蘇利兩鐵道ノ守備ニ任セシメ以テ一ハ「セメノフ」ニ対ス

ル支那ノ猜疑ヲ除クト同時ニ米國ノ誤解ヲ一掃シ一ハ以テ兵力ノ余裕ヲ生セシムルコト強チ不能ニアラサルヘシ而シテ是カ条件トシテハ何等特定ノ利權ヲ要求セス西比利亞ノ広原ヲ開發シ經濟狀態ヲ改善スル為メ外人ニ土地鉱山等ノ所有權ヲ認ムルト同時ニ「チェック」軍ノ覺書ヲ糸口トシテ人權ヲ尊重シ民意ニ基キ代表機關ヲ設ケシムルコトトセハ「コルチャク」政府ノ基礎確實トナリ前途ニ光明ヲ認メ得ルニ至ルノミナラス西比利亞ニ於ケル本邦人ノ發展ヲ助ケ帝國政府ハ露國官民ノ感謝ト同情トヲ集メ將來永ク日露ノ親交ヲ確保スルコトヲ得ン

廟議已ニ貝加爾以西出兵（脱）ニ決シタル趣ナルモ尚ホ御再考ノ余地アルヘキヲ信シ不遜ヲ顧ミス卑見ヲ申進ス

五六六 十一月二十八日 内田外務大臣ヨリ
在米國幣原大使宛（電報）

オムスク政府没落ノ形勢ニ対処スベキ方策ニ

関シ米國大使ト意見交換並訓令ノ件

別電 十一月二十九日内田外務大臣宛在米國幣原大使宛電報第八〇二号

在本邦米國大使ヨリ本國政府ニ電報セル十一月二十三日ノ内田外務大臣在本邦米國大使會談要録

第八〇〇号

十一月二十三日米國大使ヲ招キ本大臣ノ私見トシテ大体別電第八〇一号ノ趣旨ヲ述ヘ其腹藏ナキ意見ヲ求メタル処同大使モ全然個人間ノ私話トシテ腹藏ナク意見ヲ開陳スル旨ヲ斷ハリテ曰ク實ハ自分去九月西比利亞ヨリ帰任後聞モナク本國政府ニ宛テ西比利亞ノ現狀報告旁々「コルチャク」ノ周囲ニハ感服シ難キ人物多キモ「コルチャク」自身ハ信賴スルニ足ルヘキ人物ニテ他ニ之ニ代ハルヘキモノナキニ付最後迄「コルチャク」政府ヲ支持シテ西比利亞ノ時局ヲ收拾スルノ方針ヲ継続スルヲ得策トシ西比利亞ヨリ撤兵スルカ如キハ更ニ事体ヲ混乱ニ導クヘキコト明カナルカ故撤兵ノ実行スヘカラサルハ勿論前記ノ方針ヲ貫徹センカ為ニハ此上聯合側ノ兵力ヲ五万内外増加スルノ必要アリ然ラズンバ「コルチャク」ハ結局「オムスク」ヲ引揚ケ「イルクツク」ニ後退スルノ已ムナキニ至ルヘク又住民ノ慘狀極メテ寒心スヘキモノアリ聯合側ニ於テ徹底のニ且ツ協同的ニ經濟援助ノ途ヲ講セサルニ於テハ滔滔相率キテ過激派ニ投スヘク其結果測リ知ルヘカラサルモノアリ若シ米國ニシテ此儘成行ヲ觀望スルニ於テハ事体益々悪化スヘク

結局日本ハ自衛策ヲ講ゼサルヲ得サルニ至ルヘク之ニ對シ米國ヨリ苦情ヲ提起スルノ資格ナカルヘキニ付「コルチャク」政府ニ對スル關係列國共同ノ信用ヲ開キ以テ支払ノ途ヲ立テタル上物資ノ供給ヲ為スコトトスルヲ得策ト認ムル旨稟申シ置タルコトアリ尤モ右ノ如キ方策ニ付テハ議會ノ協賛ヲ要スルカ故其成否ハ予測シ難キトコロ米國側ニ於テハ從來赤十字社ニ於テ多大ノ救恤ヲ為シ居レル次第ナルカ日本側ニ於テ今後此方面ニ對シテモ一層努力セラルルニ於テハ兵力不足ノ補助トモナリ一般狀態ノ改良上裨益スルトコロ尠ナカラサルヘシ將又鐵道ノ運行ヲ円滑ニシ其經營ヲ忽カセニスヘカラサルハ勿論ナルト同時ニ其出发点タル浦塩ハ頗ル重要ナル地点ナル処同地ハ陰謀腐敗ノ巢窟ナルニ付真ニ西比利亞ヲ救済センカ為メニハ列國側ニ於テ露國ニ代ッテ一時行政ヲ為スコトトシ税関等モ共同管理トナスノ要アルヘク別電第八〇一号記載ノ趣旨ハ全然同感ナル旨述ヘタルニ付本大臣ハ我方ニテハ西比利亞問題ニ付テハ種々ノ意見アリテ政府反對党首領ノ如キハ現在ノ兵數ヲ以テ過多ナリトシ鐵道守備ニ必要ナル兵數迄減兵スヘシトノ說ヲ唱フルモ現在ノ兵數ニテモ尚ホ鐵道守備ニ不十分ナル

實況ニ付此上兵數ヲ減スルコト困難ニテ又各所散在ノ守備兵ヲ一地方ニ集中スル方然ルヘシトノ說アルモ右ノ如キ說ヲ実行スルコトトシ例ヘハ黑竜鐵道守備ノ軍隊ヲ撤シテ東支鐵道方面ニ移スニ於テハ黑竜鐵道沿線ノ過激派モ從テ東支鐵道方面ニ襲來スヘク旁々是亦実行シ難キ旨述ヘタル処同大使ハ右ハ全ク其通りニテ「チェックスロワツク」救援前ノ狀態ニ復歸スヘシト答ヘタリ尚ホ本大臣ヨリ同大使ニ對シ貝加爾以東ノ過激派軍ハ約一万六千五百、以西ノ分ハ約二万四千八百ナル旨ヲ告ケタル上為念万一「コルチャク」没落スルカ如キ場合ニ関スル同大使ノ意見ヲ叩キタル処同大使ハ其場合ニハ之ニ代ルヘキ政府ヲ組織セシムルヨリ致方ナカルヘキ旨答ヘタリ將又翌二十四日「モリス」大使ト再會ノ折必要已ムヲ得サル場合ニ米國ヨリ軍隊ヲ増派シ得ルヤ否ヤヲ尋ネタルトコロ此等ノ事柄ニ関スル國務省ノ約束ハ仮令之ヲ為シタリトテ結局當テニナラヌモノト承知アリタク平和條約事件ガ証明スルカ如ク全ク上院ノ態度如何ニ依ルモノナルガ米國ガ西比利亞ヨリ全然撤兵セサル限りハ日米間從來ノ協調ニ忠実ナルモノト見做サレタシト答ヘタリ

以上ハ本大臣ト米国大使トノ会談要領ナルカ同大使ハ右会談ノ次第ヲ別電第八〇二号ノ通り本国政府ニ電報シタル管ニ付貴官ニ於テモ右様御含ノ上別電八〇一号ノ趣旨ニ依リ米国政府当局ト適宜御折衝ノ上米国政府ノ腹藏ナキ意見突留メラレ結果詳細電報アリタク尚ホ別電第八〇一号末段英仏両国政府ノ対露政策ヲ確ムル為メ米国政府ニ於テモ至急適當措置方可然申入レラレタシ本電及ヒ別電為参考英仏伊ニ転電セラレ英仏ニハ別電第八〇一号ノ趣旨ヲ任国政府ニ内告シ前記対露政策ヲ確ムル様交渉方本大臣ノ訓令トシテ附記セラレタシ

註 別電第八〇二号ニ付テハ次掲五六七文書ノ註參看

(別電)

十一月二十九日内田外務大臣兼在米國幣原大使宛電報第八〇二号
在本邦米國大使ヨリ本國政府ニ電報セル十一月二十三日ノ内田外務大臣在本邦米國大使會談要録

STRICTLY CONFIDENTIAL

Viscount Uchida sent for me today. He told me that the Cabinet had recently discussed the critical conditions in Siberia but had reached no conclusion pending a

personal and informal exchange of views between us. He explained that the Ministry faced the necessity of formulating a definite Siberian Policy and in particular referred to Viscount Kato's recent criticism and the demand which Kato made for the withdrawal from Siberia of a substantial portion of the Japanese troops. I asked him if Kato's statement was not made for political reasons. He thought not, as Kato had to weigh his words carefully because, as a responsible party leader, he might at any time be called upon to form a Ministry. He then gave me a detailed description of military conditions in Siberia as reported to the Cabinet by the General Staff which indicated that there were some twenty thousand Bolsheviks organized in bands and operating between Omsk and Irkutsk; and that there were some seventeen thousand east of Baikal, chiefly along the Amur Railway. He then stated that the retirement of Kolchak to Irkutsk had greatly heartened all Bolshevik elements east of Omsk and that Japan could

not view the continued eastward advance of the Bolshevik without concern. If the Red Army should reach the Baikal and come in contact with Japanese troops it would be serious; if on the other hand Japan should withdraw it would mean the surrender of Eastern Siberia to Bolshevism and create at once a serious menace to Korea, Manchuria, and indirectly to Japan itself. He then outlined the three possible plans of action:

First, —entire withdrawal, which seemed to him impossible

Second, —the sending of reinforcements at once in such quantities as effectively to crush Bolshevism now

Third, —the maintenance of the status quo while awaiting developments, only sending such reinforcements as future conditions might imperatively require.

After repeating that I was expressing simply my personal view I stated that in the first place I thought

we should avoid all participation in local intrigues and continue earnestly to support Kolchak. I told him that I had reason to believe that my Government fully shared this view. In the second place, I was personally convinced that Japan and the United States should maintain their present force to protect and continue railway operations, and that I had no reason to believe that the United States contemplated the withdrawal of its troops. Finally, I emphasized my personal conviction that some comprehensive plan of economic relief must be undertaken by our two Governments, acting in the closest cooperation. Without such relief I was certain that the population would become increasingly restless and antagonistic, and that there would be no limit to the number of additional troops required.

I expressed my appreciation of Japan's natural fear of the spread of Bolshevism in Eastern Siberia and the dangerous propaganda which might follow among the masses of China and Korea and possibly to a limited

degree in Japan.

Viscount Uchida expressed his satisfaction that our personal views were so fully in accord, and stated that he intended to discuss the subject further in a Cabinet meeting. If the cabinet approved, he proposed to instruct Ambassador Shidehara to discuss the entire subject with you in the hope that our Governments might be able to agree on a united policy. He suggested that it might be wise for our two Governments to enquire of Great Britain and France what effect their present policy toward Russia would have on the situation in Siberia.

五六七 十一月二十八日 閣議決定

オムスク政府軍及シベリアノ現状ニ対スル我
政府ノ意向開示ノ上米國政府ノ方針意向確メ
方在米大使宛訓令ニ関スル件

「オムスク」政府軍隊ノ形勢先般來頗ル思ハシカラス在本邦露國大使ヨリモ往電第七七六号ノ通り通牒シ來リタル始

待ツノ外ナク差向応急ノ対策トシテハ第三策ニ出テ守備ノ比較的薄弱ナル地点ニ対シ必要已ムヲ得サル場合ニ多少ノ増援ヲ加ヘ以テ現状ヲ維持スルヨリ致方ナカルヘシ（我軍事当局ノ意見ニ拠レハ現下ノ状況ヲ以テセハ必要ノ地点ニ五六千ノ増兵ヲ要スルコトアルヘシト云フ）右ハ西比利亜ノ現状ニ対スル当方差向ノ意向ノ概要ナルカ対露問題ノ根本的解決ニ関シテハ追テ關係聯合國ニ協議ヲ要スルコトト思ハルルモ当面急要ノ問題トシテ右増兵ノ事ニ付テハ差向米國政府ノ了解ヲ得度ニ付其積ニテ國務卿ニ交渉セラレ結果電報アリタシ又當方トシテハ此際聯合側殊ニ米國力果シテ現状維持ノ方針ヲ固持スルヤ否ヤ必要已ムヲ得サル場合ニハ多少ノ増援隊派遣ヲモ辞セサル意向ナルヤ或ハ之ニ反シテ撤兵又ハ減兵ノ意向ナキヤヲ知ルノ必要アリ將又英仏ニ関シテハ我方入手ノ報道ニ拠レハ十一月八日倫敦市長就任披露會ニ於テ英國總理大臣ハ冬季中露國內各政府熟慮ノ結果來春ニ及ヒ關係列強ハ同國內亂鎮定ヲ促進スルノ機會可有之旨演說セラレタルニ対シ議會ニ於テ幾多ノ質問提起セラレタル為メ同大臣ハ是等質問ニ対シ英國政府ノ對露政策ハ從來ト異ル処ナキモ一億磅ノ支出ヲ為セル今日是以上

末ニテ我方トシテハ此際此危局ニ對スル対策ヲ講スルノ極メテ必要ナルヲ認ムル処「コルチャック」ニシテ今後形勢ヲ挽回シテ赤衛軍ヲ擊退スルニ於テハ兎ニ角若シ此上敗戦ヲ重ヌルニ於テハ或ハ帝國軍隊ヲ始メ聯合軍側ニ於テ直接赤衛軍ト相接觸スルニ至ルヤモ難計又如此形勢ニ至ラハ自然聯合側軍隊現在ノ守備區域ニ於テモ所在過激派ノ蜂起ヲ見ルコトナシトセス此場合ニ於テ聯合側ノ執ルヘキ態度三アリ第一、軍隊ヲ増派シテ反過激派ト相策應シ進ンテ赤軍ヲ擊破スルコト第二、赤衛軍トノ接觸ヲ避ケ一部又ハ全部ノ撤退ヲ行フコト第三、赤衛軍ニ對シテ攻勢ニ出デザルモ現在ノ守備區域ヲ固守シテ赤衛軍ノ東進ヲ防クコト是ナリ而シテ第一案ヲ実行セントセハ聯合軍ハ現在ノ駐屯地ヨリ更ニ西進スルノ覚悟ト多大ノ増兵ヲ為スノ決心ナカルヘカラサル次第ノ処帝國政府トシテハ此上多大ノ増兵ヲ為シ更ニ西進セシムルカ如キハ我國論ニ顧ミ到底実行シ難ク第二案ニ出ツルニ於テハ仮令一部撤退ニセヨ過激派ノ勢力ヲ夫レ丈増大セシメ結局全部撤退ノ已ムナキニ至ルヘク其結果反過激派ノ全滅ヲ來シ東部西比利亜モ遂ニ過激派ノ天地ト化スルノ虞アルトコロ本案最終ノ決定ハ今後時局ノ發展ヲ

救援ヲ為スハ到底英國財政ノ許ササル処ナル旨答弁セラレタル趣又巴里新聞紙ノ報道ニ拠レハ仏國大統領及ヒ外務大臣倫敦訪問ノ結果對露政策ニ関シテハ此上反過激派政府ニ對シ武器竝ニ金錢上ノ補給ヲ繼續セサルヘキコトニ英仏兩國間ニ意見ノ合致ヲ見タル趣ナルガ英仏當局ノ真意果シテ右ノ通りナリヤ否ヤ未タ確知セサル処ナルモ果シテ右ノ通りトセハ右二國政府ニ於テハ西比利亜ニ於ケル赤衛軍ノ勢力今後益々増大スルコトアルモ反過激派ニ對スル援助ハ此上之ヲ与ヘラレサル方針ナリヤ此際此点ヲ確知シ置クノ必要アリ就テハ貴官ハ前述米國政府ノ方針意向ヲ確メラルルト同時ニ國務卿ニ於テ異存ナキニ於テハ米國政府ニ於テモ我方ト共同シテ英仏兩政府ニ右ノ点ヲ確ムル様可然措置アリタシ

（欄外註記）

大正八年十一月二十七日外交調査會決議（内田外相印）

註 右全文ハ十一月二十八日内田外務大臣ヨリ在米國幣原大使

宛第八〇一号ヲ以テ電報セラレタリ

五六八 十一月三十日

在ハルビン佐々木總領事代理ヨリ
内田外務大臣宛（電報）

加藤大使一行イルクーツク着ノ件

第一〇八七号

(十二月一日接受)

加藤大使ヨリ第二七一号

本使一行十一月二十八日イルクツーク着

註

加藤大使一行ト同大使ノ外松島書記官中山外交官補伊藤(金)副領事島田書記生和田書記生及笹本留学生ノ六名ナリ

五六九 十二月五日

在長春村上領事ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

オムスク政府保管金塊輸送先ニ関スル件

第一八六号

佐々木ヨリ閣下へ第一〇九八号

加藤大使ヨリ本官宛第二二一号

(在伊国日本国大使館) 菊地財務官宛貴電第一〇八号ニ関シ前大蔵大臣ノ語ル処ニ依レバ金ノ輸送先ニ関シテハ閣議ノ際議論ノ岐レタル処ナルモ「コルチャク」ハ自己ノ滞在地ニ之ヲ保管センコトヲ主張シタル為全部「ノウォニコラエフスク」迄輸送シタル趣ナリ

本電報大臣及政務部へ転電アリタシ

五七〇 十二月十五日

内田外務大臣ヨリ
在イルクツークニ瓶領事宛(電報)

地未着ノ結果当館ノ事務ハ殆ト電信ノ取継ニ局限セラレ在留民ニ関スル事務モ閑散ニ付此ノ際島田ヲ事務代理トシテ本官及小柳ハ六百名ノ在留民ヲ有シ時局柄次第ニ重要ノ地位ヲ占メツツアル「チタ」ニ引揚クル方事務ノ関係上適當

加藤大使ノイルクツーク滞在ニ関シ訓電ノ件

第四八号

加藤大使へ

第一三一号

貴電第二七四号前段ニ関シ貴地方面ノ形勢仍ホ極メテ不安定ナルノミナラス西比利亞増兵問題ニ関シ目下米國其他トモ交渉中ノ次第ナルニ顧ミ尚暫ク貴地ニ滞在セラルル様致シタシ

五七一 十二月二十三日

在浦潮松平政務部長ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

加藤大使一行イルクツーク来着ニ付ニ瓶領事

及小柳「チタ」ニ引揚方請訓ノ件

第六三〇号

在「イルクツーク」ニ瓶発本官宛電報第八四号左ノ通り

大臣へ転電アリタシ

貴電第四九号ニ関シ加藤大使一行ハ市中トノ交通杜絶スルモ引揚停車場ニ滞在スヘシトノ御意見ナルカステハ電信ノ取継其他事務ノ連絡ヲ保ツ上ニ於テ不便渺カラサルニ付往電第一〇四号ノ通り請訓シタル次第ナリ尚加藤大使一行当

ナル可シト思考セラル就テハ本件ニ関シ至急何分ノ御回電アリタシ